

## はじめに

日本海側ほぼ中央に位置する能登半島の大部分を占め石川県北部に相当する能登地域は、内外の環日本海交流の拠点の一つであったという歴史的背景や、外・内で性格の異なる海洋に囲まれた半島地域という地理的背景などから、古来より独特の文化・伝統を育み、豊かな自然を残す地域として現在に至っている。

一方、近年では少子・高齢化や産業の衰退が進んでおり、地域の活力を今後いかに高めていくかという深刻な課題に直面している地域でもある。こうした中、地域振興の切り札的プロジェクトとして大きな期待が寄せられている「能登空港」が平成15年7月に開港した。首都圏との交流上大きな障害とされた時間距離が短縮され、開港を機に各地で改め地域振興に向けた取り組みの機運が盛り上がりを見せているところである。

本稿は、こうした状況を踏まえ、能登地域の振興策の一つとして観光産業に着目し、その今後の方向性について考察するものである。現下の経済環境を考えれば、今や域外からのビジネス誘致に依存できる時代ではなく、能登地域の比較優位による内発型の地域振興を目指す必要がある。この点で、能登地域の豊かな自然や癒しの景観、新鮮で安全な食材、独自の文化や伝統産業など、地域の秀でた資源を活用できる観光産業には十分な将来性があると考えられ、観光産業の振興は重要な地域課題と位置づけられよう。

本稿の構成としては、まず第1章で能登地域の現状を整理するとともに、魅力を高めようという最近の地域内の取り組み事例を紹介する。第2章では、これらの取り組みを発展させるためのポイントを整理する観点から、最近の志向にマッチした二つのタイプ、「まちなか観光」・「体験滞在型観光」に取り組むことで成果を上げている全国の代表例を題材に、成功の基礎となる共通要因を考察する。第3章では、能登地域の観光振興上も効果的と考えられる「まちなか観光」・「体験滞在型観光」への取り組みを後押しすべく、能登地域の資源を改めて整理した上で、前章で整理した共通要因を踏まえ、これらを活用した具体策の方向性を探ってみたい。

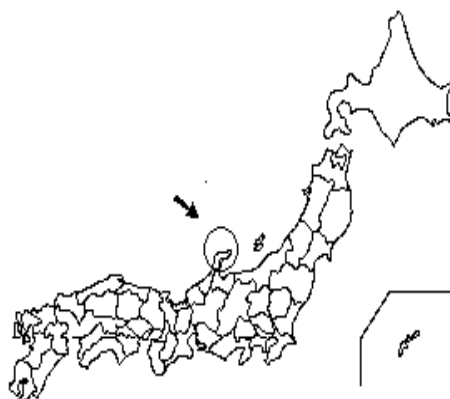
## 第1章 能登地域の現状整理

### 1. 能登地域の概要

図表1：能登地域<sup>(注1)</sup>基礎データ

面積	1,977.41km <sup>2</sup>
人口	239,263人
人口増減率 (H7/H12)	△5.5%
高齢者比率	27.1%
就業者数	123,676人
就業構造	
第1次産業	10.6%
第2次産業	35.2%
第3次産業	54.1%

能登地域位置



出典：石川県「石川県統計書」

数値は平成12年10月1日現在

#### (地勢)

能登地域は、石川県北部、日本海に突出した能登半島に位置する。地形は、低山地と丘陵が広がる内陸部と、切り立った断崖が特徴の外浦（日本海側）と波穏やかな内浦（七尾湾側）に分かれる海岸部により構成されており、豊かな自然が残されている地域である。気候は、夏には気温30度を超え海水浴も楽しめるのに対して、冬は氷点下10度程度まで冷え込むこともあるなど、四季がよりはっきりと感じられる地域である。

#### (人口)

能登地域の人口は、昭和30年台には約40万人程度であったが、それ以後人口減少が続き、現在では19市町村合計で24万人弱となっている。人口構成を見ると、高齢者比率は27.1%と全国平均（17.3%）を大きく上回っており、少子高齢化が急速に進んでいる地域であるといえる。

#### (産業)

産業は、豊かな自然を背景として農業、漁業をはじめとした第1次産業が盛んな地域であるが、近年従事者は減少し収穫高・漁獲高共に減少傾向にある。また、企業誘致により南部を中心として第二次産業（製造業）の集積も一部に見られるが、近年は海外進出や景気低迷を背景として企業立地が停滞している。

この他、首都圏から時間距離が離れた風光明媚な秘境として、昭和30年代にブームになってからは、観光産業も重要な位置を占めるようになってきている。

(注1) 本稿では統計活用の便宜上、能登地域の範囲を石川県羽咋郡以北4市14町1村とする。

## 2. 能登地域での観光産業の現状

### (1) 重要な観光産業

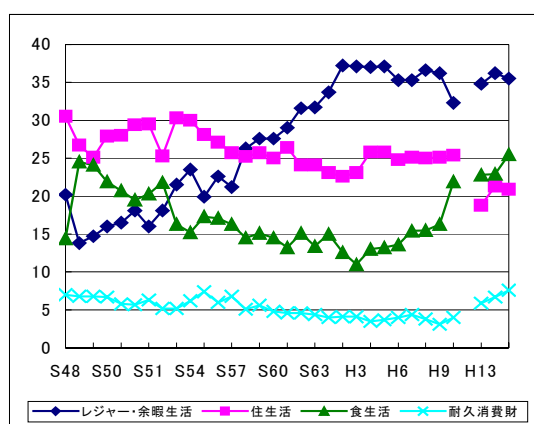
人口減少が進み産業も衰退傾向にある中、能登地域では近年観光産業が地域振興の柱の一つとして改めて注目を集めている。

観光産業は、以下にみるように「将来性」、「波及効果」等の面で地域振興上重要であると考えられる。

#### ①将来性

内閣府が平成15年6月に行った「国民生活に関する世論調査」によると、今後の生活の力点として「レジャー・余暇生活」の回答割合が35.5%と最も高く、依然として「食生活」「住生活」などを上回る関心事となっている(図表2)。観光はこうしたニーズを満たす活動の一つであり、将来的にも有望な分野であると考えられる。

図表2：今後の生活の力点<sup>(注2)</sup>(単位：%)



出典：内閣府「国民生活に関する世論調査」

#### ②波及効果

観光産業は裾野が広く、波及効果が幅広く及ぶ。例えば、観光地における「食べる」「土産を購入する」「泊まる」という行為による直接的効果のほか、原材料購入等の誘発効果もあり、地域にとって影響の大きい産業であるといえる。

国土交通省が平成15年10月に発表した「旅行・観光産業の経済効果に関する調査研究Ⅲ」によると、平成14年の旅行消費額は21.3兆円と推計されるが、誘発効果まで含めると49.4兆円となり、これは国内生産額<sup>(注3)</sup>の5.4%に相当する。

また、雇用効果(誘発効果を含む)は398万人と推計されており、これは全国の就業者数6,622万人<sup>(注4)</sup>の6.0%に相当する。

(注2) 昭和49年度～51年度は年2回、平成9年度～13年度は隔年調査を実施。

回答方法は平成11年度までは単数回答、平成13年度以降は複数回答。

(注3) 「産業連関表延長表」(経済産業省)による2001年度の国内生産額。

(注4) 「国民経済計算年報」(内閣府)による2001年就業者数。

## (2) 能登地域の観光動向

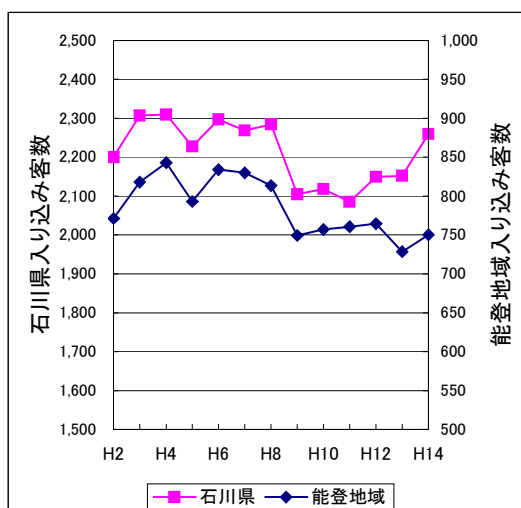
では、能登地域の観光産業はどのような状況にあるのか、本節ではその傾向を整理していくこととしたい。

### ① 入り込み客数は減少傾向

能登地域への入り込み観光客数は、平成14年度はNHK大河ドラマの影響等により一時的に増加しているものの、趨勢としては平成4年をピークとして減少傾向が続いている(図表3)。

平成14年度は、ピーク時の843万人から93万人減の750万人となった。石川県全体の入り込み客数がここ数年は若干回復しているのに対し、能登地域では依然伸び悩みが続いている。

図表3：観光客入り込み客数 (単位：万人)



出典：石川県「統計からみた石川の観光」

### ② 「見る」観光から「体験する」観光へ

図表4は、能登地域における入り込み客数上位の観光地について、平成元年と14年とを比較したものである。

観光地ごとに入り込み客数の概念が異なるため単純には比較できないものの、傾向としては巖門に代表される「見る」だけのスポットや温泉の入り込みが減少しているのに対し、能登食祭市場、のとじま臨海公園など、「食す」「行動する」といった体験型の観光スポットが人気を集めているといえる。

図表4：石川県主要観光地別入り込み客数 (単位：千人)

	平成元年	平成14年
1位	巖門 (2,263)	和倉温泉 (1,249)
2位	和倉温泉 (1,467)	能登食祭市場 (909)
3位	千里浜 (762)	千里浜 (846)
4位	気多大社 (557)	巖門 (557)
5位	輪島市旅館等 (444)	のとじま臨海公園等 (510)

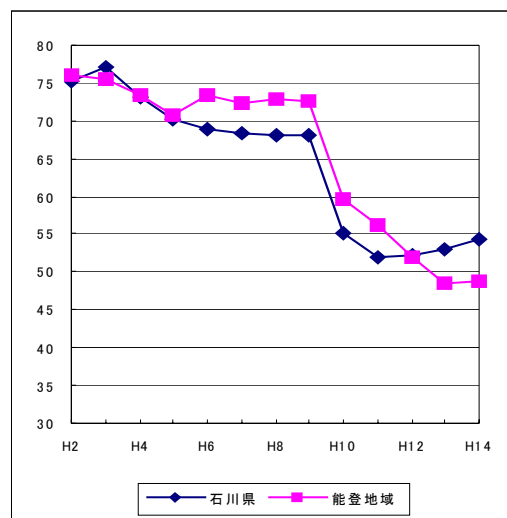
出典：石川県「統計からみた石川の観光」

### ③県外客が大きく減少

入り込み観光客の構成を出発地別に見ると、石川県全体では、平成に入って70%台で推移していた県外客の比率が、平成14年には54.4%にまで減少している。

能登地域でも同様の動きを見せており、県外客の比率が平成14年には48.7%と、全体の半分弱にまで減少しており、県外客の取り込みが今後の課題の一つであると考えられる(図表5)。

図表5：県外客比率の推移 (単位：%)



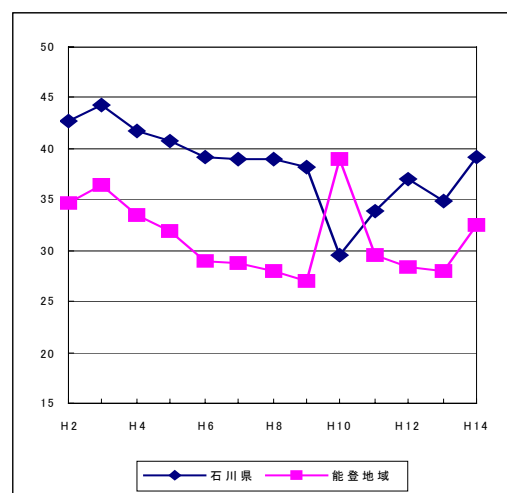
出典：石川県「統計からみた石川の観光」

### ④能登地域内での宿泊割合が低い

能登地域は、交通の便が決して良くないことから地域内に宿泊する観光客の割合が高いようにも考えられる。しかしながら実際には、30%を下回る水準で推移しており、石川県全体より低位にとどまっている(図表6)。

能登地域での観光は通過型になっており、宿泊は金沢等他地域へと流出していると推測され、地域内に滞在してもらうことも課題の一つと考えられる。

図表6：宿泊者比率の推移 (単位：%)



出典：石川県「統計からみた石川の観光」

### (3) 交通アクセスの改善 ～平成15年7月能登空港開港～

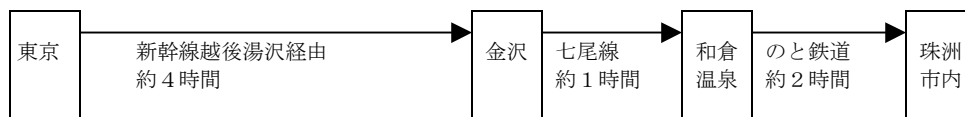
従来、能登地域は東京からの時間距離が最も遠い地域であると言われており、能登半島の突端まで行くには電車やバス、レンタカーなどを乗り継いで5時間以上かかる観光の「難所」であった。

しかしながら、平成15年7月7日に地域待望の能登空港が開港し、時間距離は大幅に短縮されることとなった。例えば、羽田空港から玄関口能登空港まではわずか約1時間で、最先端の珠洲市までも2時間程度での到達が可能になり、めざましいアクセスの改善が図られた。また観光客は、能登空港イン、小松空港アウトといったように広域的な観光ルート形成の選択肢が増加した。

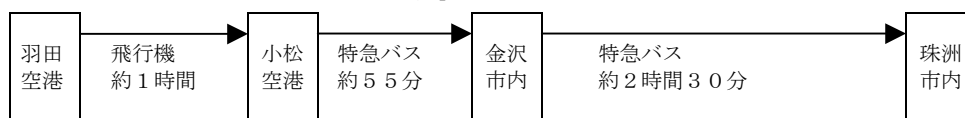
能登空港発着便の平均搭乗率は、平成15年7月から平成16年2月の累計で83.4%となっており、順調な滑り出しである(図表7)。2次交通についても、目的地までの均一料金制相乗りタクシー「能登空港ふるさとタクシー」が活用されている。

#### アクセス別・所要時間一覧(乗り継ぎ時間含まず)

【JR・のと鉄道利用：合計乗車時間 約7時間】



【小松空港利用：合計乗車時間 約4時間25分】



【能登空港利用：合計乗車時間 約1時間45分】



図表7：能登空港平均月別搭乗率(平成15年7月～平成16年2月)

	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	累計
搭乗率	91.6%	98.3%	91.3%	93.2%	91.4%	68.7%	63.3%	70.7%	83.4%

出典：石川県空港企画課能登空港企画室作成資料より

#### ●能登空港ターミナルビル



#### ●のとふるさとタクシー



### 3. 能登地域で進む新たな取り組み

前節で見たように、能登地域に関しては、「見る」観光から「体験する」観光へのニーズの変化をとらえ、県外客の取り込みや域内滞在の増加を図ることが課題となっている。

一方で、空港開港によるアクセス改善により、ニーズに合った的確な対応がなされれば、大きなマーケットである首都圏から観光客を獲得できる大きなチャンスが到来しているともいえる。

こうした中、各地でその魅力向上に向けた様々な取り組みがなされはじめている。本節では、代表的な例をいくつか紹介することしたい<sup>(注5)</sup>。

#### (1) 「輪風のふれあいに出会えるまち」づくり ～輪島市～

図表8：輪島市基礎データ

面積	268.67km <sup>2</sup>
人口	26,381人
人口増減率 (H7/H12)	△6.5%
高齢者比率	28.5%
就業者数	13,916人
就業構造	
第1次産業	14.7%
第2次産業	35.0%
第3次産業	50.3%

出典：石川県「石川県市町村勢要覧」  
数値は平成12年10月1日現在

能登半島の北岸部に位置する輪島市は、人口約2万5千人、伝統産業「輪島塗」と「朝市」で有名な能登地域の主要観光都市である。

近年の観光客入込概数は、平成3年の255万人をピークとして減少傾向にあり、平成14年にはピーク時の半分以下の118万人にまで減少している。

所、TMO等により進められている。

そこでは、有名な朝市といくつかの観光拠点をスポット的に観る通過型観光ではなく、まちなかを回遊し輪島の歴史や文化に触れる滞在型の観光の受け皿を整えることに力点が置かれている。

具体的には、

- ・道路の拡張や電柱地中化により歩きやすいまちを整備
- ・市内7つの商店街に休憩施設を設け、地域の交流拠点として活用
- ・輪島にしかない物を取り扱う、あるいは料理を提供する、「輪風の店」を整備
- ・「まちなみ景観保全条例」を制定し、歴史的まちなみを保護
- ・職人や伝統工芸との交流を目指し、輪島工房長屋を建設
- ・朝市のほか、地物にこだわった能登圏輪島地物市を開催

といった取り組みにより観光客が歩いて楽しめるまちづくりが進められている。

このうち、最近の事例として特に注目される「輪島工房長屋」「能登圏輪島地物市」について以下で見よう。

(注5) ここで紹介する他、官民で様々な取り組みが行われている。これらについては、参考資料1を参照されたい。

### 「輪島工房長屋」

平成15年7月、まちづくり事業の一環として、輪島市わいち通り商店街の隣接地、重蔵神社前の長屋跡地にオープンしたのが、輪島塗の情報発信基地「輪島工房長屋」である。

工房長屋は、輪島のモノづくり、人づくり、まちづくりのための創造、交流発信の場としての役割を目的とした施設で、8つの工房を有している。

このうち「職人工房」では独立自立を目指す職人が住み込みで創作活動を行っており、来訪者と職人とが気軽に輪島塗に関する会話を楽しむことができる。このような環境を整え、交流を促進することで輪島塗への理解を深めてもらうことを意図している。スタートを切ったばかりであるが、工房内の職人同士が連携して作品を作り、販売する試みが始められるなど、工房長屋発の新しい情報・商品の発信につながっている。工房長屋は、伝統産業を観光に活かした新しい施設として、観光客の増加及び輪島塗の産業発展への寄与が期待されている。

#### ●輪島工房長屋



#### ●電柱地中化・景観統一がなされた馬場崎商店街



### 「能登圏輪島地物市」

有名な輪島の朝市は、毎月10日と25日は休業日となっており、休業日のまちなかは閑散としていることが多かった。そこで平成14年より朝市の休業日に、朝市通り続きの「わいち商店街・賑わいの道」約180メートルの区間で、「能登圏輪島地物市」という能登の地物にこだわった市が開催されている（平成15年9月からは輪島工房長屋周辺へ移動、平成16年1月からは土曜、日曜、祝祭日も試験的に開催）。

地物市の開店時間は、10日、25日は午前8時から12時まで、土曜、日曜、祝祭日は午前10時から15時までで、主に朝市同様新鮮な海産物や農作物の販売店を中心に毎回20店舗強が出店し、まちに賑わいを作り出している。輪島の新しい魅力の一つとして今後の動向が注目される。



## (2) ハーブを活かしたまちづくり ～珠洲市～

図表9：珠洲市基礎データ

面積	247.19km <sup>2</sup>
人口	19,852人
人口増減率 (H7/H12)	△8.0%
高齢者比率	33.2%
就業者数	10,142人
就業構造	
第1次産業	16.4%
第2次産業	33.5%
第3次産業	50.1%

出典：石川県「石川県市町村勢要覧」  
平成12年10月1日現在

珠洲市は、能登半島の先端に位置し、三方を海に囲まれた地域である。人口は、市政施行時の昭和29年には3万8千人であったが、現在はほぼ半分の2万人弱にまで減少し、高齢者比率は33.2%に達している。

昭和50年代にはヒット曲による能登ブームを背景として、見附海岸や狼煙祿剛崎灯台といった景勝地に多くの観光客が訪れた。しかしながら現在では入り込み客数はピーク時（昭和53年）

の年間164万人から、平成14年には半分以下の71万人にまで減少している。

こうした中、珠洲では最近、郊外にあるハーブ園を訪れる通過型観光客をまちなかに呼び込むべく、特産品のハーブを利用してまちの魅力を高めようという取り組みが進められている。

核となっているのは、市内の飯田商店街店主を中心とした出資者87名により平成15年1月に設立されたTMO「株式会社夢のと」である。

具体的な取り組みとしては、

- ・飯田商店街にてハーブのプランターや情報ボードを設営
- ・商店街の空き店舗を暫定的に利用し、ハーブ商品のアンテナショップを出店

といった活動が現在行われている。

さらに、まちなかの回遊を促すための今後の構想として、

- ・ハーブ商品の販売やリースづくりを体験できる「ハーブ集積館」、FMラジオなどの文化情報発信基地となる「IT館」、現在行われている朝市の鮮魚版となる「海鮮市場」の3つの核施設を整備
- ・アメリカのデザイナーなどの視点を取り入れ、歴史ある建物や商店を雰囲気は残したまま現代風に活用する

といった取り組みが計画されており、今後これらの進捗によるまちの魅力向上が期待されることである。

### ●夢のとアンテナショップ



### ●ハーブのプランターが置かれた商店街



### (3) 「春蘭の里」によるグリーン・ツーリズムの取り組み ～能都町～

図表10：能都町基礎データ

面積		115.46km <sup>2</sup>
人口		11,433人
人口増減率 (H7/H12)		△9.1%
高齢者比率		31.1%
就業者数		5,626人
就業構造	第1次産業	14.7%
	第2次産業	32.2%
	第3次産業	53.0%

出典：石川県「石川県市町村勢要覧」  
 数値は平成12年10月1日現在

能都町は、能登半島の内浦に面する人口約1万2千人弱のまちである。

26kmにわたる海岸線を有し豊富な海の資源を抱えるほか、山間では農業も盛んで、その自然資源を活かした観光振興の取り組みが進められている。その一つが「春蘭の里」によるグリーン・ツーリズムの取り組みである。

平成8年9月、能都町の中心部から南西約20km離れた山間の宮地・鮭尾集落で、農家の

ほか異業種に携わるメンバー7名が集まり「春蘭の里実行委員会」を結成した。委員会は、10年後には農家が半減するのではないかと地域に深刻な過疎化問題に対して、自分達が恩恵を受けてきた自然環境・地域の価値を再認識し、都市との交流を進める形での村づくり、村おこし活動を行っている。

平成9年には農家の建物を改築した民宿「春蘭の宿」を開設した。ここでは、「くつろぐ」「みる・ふれる」「食す」といった民宿ならではのサービスを十分に堪能してもらうために、宿泊者を1日1組に限定している。また、昔の生活体験ができるサービスも提供されており、具体的には、春の山菜採りにはじまり、キノコ狩り、野菜の栽培、収穫、田植え、稲刈りのほか、なれずしなどの漬物づくりや五右衛門風呂の風呂焚きなどの体験メニューが用意されている。

また、委員会のメンバーは個人でも農家民宿を開設し始めており、取り組みが徐々に広がっている。

これらの活動は、能登地域におけるグリーン・ツーリズムのはしりであり、今後の動向が注目されるところである。

このほか、能都町では地域の食文化に触れてもらう取り組みも行われている。

平成15年11月「海のグリーン・ツーリズム推進事業」として、「鯨楽旬談 ～鯨フォーラム in 能登」が開催された。これは、地域の食文化である「鯨料理」を知ること、食べることに加え、大敷き網（定置網）や魚市場の見学、水産加工品や海のインテリア（ガラス玉など）の制作などを体験してもらうイベントとして町が企画したものである。

イベントには、首都圏からのツアー企画による観光客の参加もあるなど、高い関心が寄せられており、今後の発展が期待される。

#### (4) 能登地域に関するPR活動

##### ①能登ブランド認定事業

能登には、多彩な食材・産品があるものの、その多くは知名度が低くその価値を活かしきれていない。こうした中、平成15年4月、能登産品のブランド認定を行う「特定非営利活動法人のとNAIS (Noto Agricultural and Industrial Standard) が設立された。

「のとNAIS」は、能登地域で一定の基準に適合する産品等を「能登ブランド」として認定することにより、能登固有の特性や魅力をもつ「能登産」産品の信頼性を高め、「能登ブランド」としてアピールしていくことを目的としている。

認定の要件は、地域にあるものを主原料として製造されたもの、又は地域に古くから受け継がれてきた基本的な技術又は技法によって製造されたものであること等となっており、消費者団体代表などによって構成される第三者機関「のとNAIS認定委員会」が判断を行う。認定商品は、認定マークを使用できるほか、のとNAISのホームページ (<http://www.nbt-tv.jp/nais.htm>) に掲載されることとなっている。

このような地域ブランド構築に向けた取り組みは、地域資産の価値を高める手段として有用であると考えられ、今後の進展が期待される。

##### ②「のたらぼち」と「地酒列車」

平成11年11月、東京銀座に開店した「のたらぼち」は、能登地域の地域おこしなどに関わる企業経営者ら有志26名が設立した株式会社能登百正が運営する能登料理居酒屋で、東京において能登のPRを行ういわば「食」のアンテナショップ的存在である。店の内装は能登のヒノキ材とアテ材が使われ、食器についても皿やガラスにいたるまで能登の製品を利用、食材も能登産にこだわり大半を空輸している。能登の珍味や地酒を並べる店として好評を博している。

また、のたらぼちの出資者が参画するNPO法人「能登ネットワーク」は、平成15年11月「能登地酒列車&食談義」というイベントを開催した。これは、地酒を活用した地域間交流事業として従前から行われてきた「地酒列車」イベントを発展させたものである。

今回は2泊3日あるいは3泊4日の行程で、上野駅より夜行列車で能登杜氏自慢の地酒を酌み交わしながら能登に向かい、能登では11のテーマと宿泊施設に分かれて多彩なゲストと食談義が行われた。

地域資産である「地酒」を1つの材料として首都圏との交流を図り、能登の魅力をPRする取り組みとして注目される。

## (5) 自治体による誘客への取り組み

能登空港開港を契機として、県・関係市町村では能登への誘客に向けた様々な施策を打ち出している。

具体的には、

- ・ 県と関係市町村が全国初の搭乗率保証制度を創設（搭乗率が7割を下回った場合、差額を最大2億円補填）
  - ・ 能登空港利用者に対する運賃助成制度を各市町村で実施
  - ・ 冬の集客事業として、県出身の著名な料理人を起用し「食」を前面に打ち出した観光キャンペーンを首都圏で展開
  - ・ 東京・有楽町にアンテナショップとして「有楽町能登ふるさと館」を出店
- といった取り組みが行われている。

また、平成15年には「石川グリーン・ツーリズム推進特区」の一つに能登地域を指定し、農家民宿の開業や市民農園の創設に関する規制緩和を行い、体験滞在型の新しいタイプの観光の促進を図っているところである。

●有楽町能登ふるさと館入口



●有楽町能登ふるさと館店内



#### 4. 今後の発展に向け必要な視点

観光の志向は、個々人の興味により主体的に選択した観光地を個人・小グループ単位で訪れるという方向に変化している。こうした中で地域間競争に勝ち抜くには、「ここではこういったまちに出会える、こういった体験ができる」という明確な情報の発信、観光客側の期待にかなう差別化された観光資産の提供、地域イメージ・ブランド力の向上といった点を重視していく必要がある。

参考資料1でまとめたように、現在、能登各地で数多くの取り組みがなされており、前節で取り上げたような進展も見られるが、今後の深化のためにはこうした点を再確認した上で各々の魅力を高めていくことが必要であろう。そして、魅力ある観光資産が重層的に形成されれば、ニーズに応えられるだけの多様なオプション・メニューが備わり、半島全体の観光の底上げにつながると考えられる。

一方で、能登での現状の取り組みに関しては、例えばまちづくりについてはハードだけでなくソフトを充実させるなど一層の魅力づくりへの努力が必要と考えられる。また、グリーンツーリズムにしても、受け入れ態勢やPRの点で課題が残っており、都市から人を継続的に呼び込むための様々な工夫が必要となろう。

そこで、次章では、最近の志向にマッチし、能登地域の観光振興を考える上でも参考となる二つのタイプの観光（「まちなか観光」・「体験滞在型観光」）を紹介し、そのポイントについて考えてみたい。

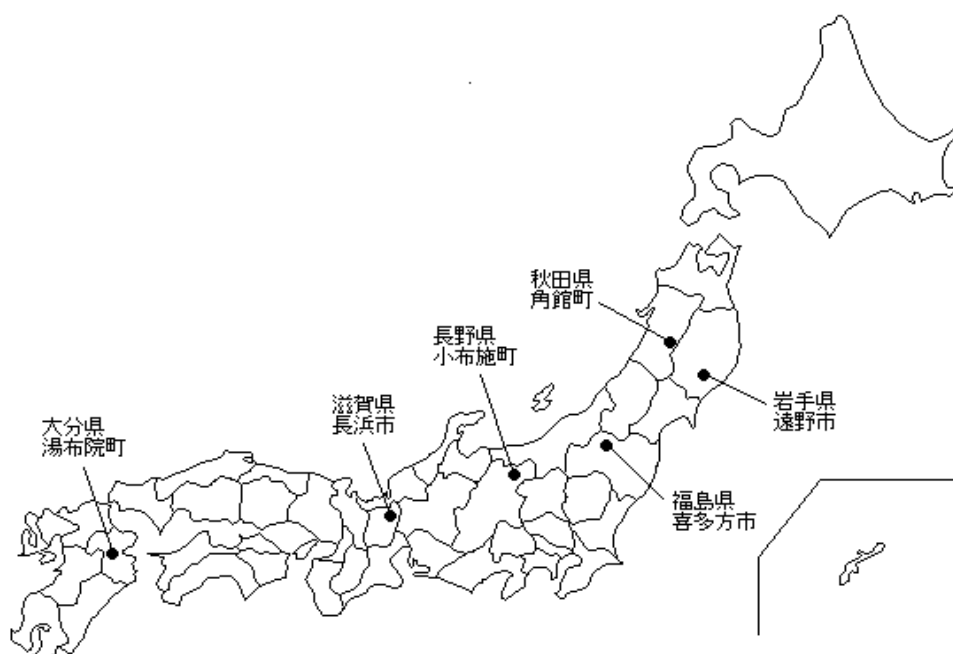
## 第2章 注目される「まちなか観光」・「体験滞在型観光」とそのポイント

### 1. 「まちなか観光」・「体験滞在型観光」による地域活性化事例

#### (1) 「まちなか観光」による地域活性化事例

観光に対する志向は、景勝地・名所旧跡を団体で巡り楽しみを共感するタイプから個人個人の価値観や興味を充たす自分なりの体験を求めるタイプへと変化しつつある。こうした中、「まち」を思い思いに回遊し見る・食べる・買う・感じるといった行動を取りながらそのまちの雰囲気味わうという、いわゆる都市観光の一形態に関心が寄せられている。こういったタイプの観光を本稿では「まちなか観光」と呼ぶことにする。全国的に注目を集めている観光地にはまちなか観光のニーズを的確に捉えてまちづくりを行っている地域が多い。これらには総じて、①美しい景観やなつかしさを感じる生活風景、評判の料理・菓子などの食、洗練された工芸品や服飾品、感性に訴える美術や文化芸能等、各々は傑出したものでなくともこれらの複合によりまち全体として高質な観光資産になっている、②これにより、まちが他と差別化された固有の雰囲気を有している、といった特徴が見られる。そのうちのいくつかの事例について各地域での代表的な取り組みとそのポイントを整理したのが図表11である。

まちなか観光地の例



図表 1 1 : まちなか観光による地域活性化事例

1. 秋田県角館町

地域概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・秋田県内陸部に位置する人口1万5千人弱のまち。</li> <li>・380余年前に作られた城下町の雰囲気をも今に残し、武家町（武家屋敷）、商人町、桜を活用したまちづくりを実施。</li> </ul>
代表的な取り組み	<ul style="list-style-type: none"> <li>・武家町、商人町の保存（伝統的建造物群保存地区指定）や、桜の植樹により、城下町としての景観を維持。</li> <li>・住人不在で荒廃していた名家「西宮家」の武家屋敷を整備し、観光の拠点として利用したほか、駅前やまちの中心部を歩きやすい道へと整備。</li> <li>・様々な職業のメンバーで構成された市民団体「角館企画集団トライアングル」が中心となり、普段開放されることのなかった商家の蔵や座敷を見物させる「外町（商人町）案内人」等、付加価値をつける取り組みにより、それまであまり注目されていなかった商人町へも人を誘客。</li> </ul>
取り組みのポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域の歴史と文化の象徴である武家町などの景観を観光業者、市民、行政の協力により一体となって守っている。</li> <li>・「角館企画集団トライアングル」による活動等を通して、新たなまちの資源活用方策を創出している。</li> <li>・秋田新幹線開業を機として、鉄道会社と連携してのキャンペーンや、現地での個人観光客向けの情報発信活動を強化し、地域のイメージ浸透が図られている。</li> </ul>

2. 岩手県遠野市

地域概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・岩手県東南部に位置する人口2万7千人のまち。</li> <li>・地域の古き良き日本の田園風景を保護し、「民話のふるさと」をイメージしたまちづくりを実施。</li> </ul>
代表的な取り組み	<ul style="list-style-type: none"> <li>・伝統的建築物である「南部曲り家」を移築保存するなど、地域に残る昔ながらの風景を維持。</li> <li>・地元に伝わる昔話（民話）等の地域資源を観光資産化し、田舎ならではの魅力を観光客に伝達。</li> <li>・遠野物語の世界を体感できるルートの形成や、「遠野昔話まつり」など多様なイベントの開催により地域イメージを発信。</li> </ul>
取り組みのポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・市が中心となり、「民話のふるさと」としてのイメージ形成に向けた取り組みが地域全体で行われている。</li> <li>・地域に伝わる昔話（民話）などそれまで利用されてこなかった地域資源を見直し、住民の協力を得て交流を重視した観光施設を整備するなど、工夫をこらした観光資産を形成している。</li> <li>・個人観光客に対し、地域の情報がわかりやすく提供されているほか、地域との交流が図られる様な形でプロモーション活動が行われている。</li> </ul>

3. 福島県喜多方市

地域概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・福島県の内陸部、会津若松市に隣接する人口3万7千人程のまち。</li> <li>・市内に点在する2,600余りの蔵と集積していたラーメン店を利用したまちづくりを実施。</li> </ul>
代表的な取り組み	<ul style="list-style-type: none"> <li>・市内に残る蔵の保存・再生とあわせて、酒や味噌、醤油の蔵を観光客が見学できるように開放。</li> <li>・商工会が中心となって「蔵とラーメンのまち」として積極的にPR。店側も食べ歩きのためのラーメンマップを作成するほか、食べ歩き可能な少量での提供に協力。</li> </ul>
取り組みのポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・お互いが客を囲い込まないようにするなど、地域の商業者間での協力体制が構築されている。</li> <li>・蔵の外観を見るだけでなく、製品の味や香りを体感できる蔵とすることで、観光の幅を広げている。</li> <li>・まちなか歩き、食べ歩きのために必要なマップなどの情報を提供し、ニーズの掘り起こしを行っている。</li> </ul>

#### 4. 長野県小布施町

地域概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・長野県北部に位置する人口1万1千人強のまち。</li> <li>・地域にゆかりのあった葛飾北斎や歴史を有する栗菓子店を核として、文化的なまちづくりを実施。</li> </ul>
代表的な取り組み	<ul style="list-style-type: none"> <li>・葛飾北斎の作品を集めた全国でも珍しい美術館「北斎館」を建設。</li> <li>・「北斎館」近隣では、町並み修景事業を実施し、地域の特産品栗菓子の老舗や歴史的民家と周辺建物との景観を統一。</li> <li>・住宅地では、住民の庭に花を植えて観光客の目を楽しませるフラワーガーデン事業を町と住民の協力により展開。</li> <li>・地元出資で設立されアンテナショップなどを運営する「ア・ラ・小布施」が積極的に情報を発信。平成15年には「小布施見にマラソン」等市民主体の特徴的なイベントを実施。</li> </ul>
取り組みのポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・住民含めて地域全体で継続的にまちづくりの取り組みを展開している。</li> <li>・観光施設を徒歩圏内に配置したほか、住宅地でも花を楽しめるようにするなど、まちを歩いてもらえる環境を整備している。</li> <li>・住民主体でのイベント開催などを通して、観光客と地元住民との交流を進め、地域に活気を生み出している。</li> <li>・地域の情報を細かに発信し、訪れる観光客のイメージ形成を補足している。</li> </ul>

#### 5. 滋賀県長浜市

地域概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・滋賀県、琵琶湖畔に位置する人口6万人弱のまち。</li> <li>・かつてシャッター通りと化していた商店街を、歴史的建造物である黒壁の建物を中心としたまちづくりで再生。</li> </ul>
代表的な取り組み	<ul style="list-style-type: none"> <li>・歴史的建造物である旧銀行の黒壁の建物を改築し、ガラス工芸品店として整備したほか、周辺の建物も景観を統一。</li> <li>・賃料を低く設定することで多種多様なテナントを誘致し、バリエーション豊かな店舗を集積。</li> <li>・ホームページ掲載内容の充実やラジオ等を使った特徴的な地域情報発信を実施。</li> <li>・まちなか歩き用に見やすいマップを作成。</li> </ul>
取り組みのポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・商店街関係者のほか、地元企業や住民など多数の関係者が参加してのまちづくりが行われている。</li> <li>・新しくガラス工房を地域に取り入れると共に、昔ながらの雰囲気との融合を意識した統一感の形成により、まちの魅力を高めている。</li> <li>・店舗展開にあたってはテナントミックス形成を行い、まちなか観光に必要な「食べる」「作る」等要素を取りそろえている。</li> <li>・個人観光客に向けた情報発信活動が充実しており、口コミの効果もあらわれている。</li> </ul>

#### 6. 大分県湯布院町

地域概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大分県のほぼ中央に位置する人口1万1千人強のまち。</li> <li>・開発から田園風景を守り、湯量豊富な温泉と自然に親しめるまちづくりを実施。</li> </ul>
代表的な取り組み	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ダム建設、ゴルフ場、リゾート開発への反対運動に取り組み、「潤いあるまちづくり条例」を制定するなど、田園風景を維持。</li> <li>・地元の素材を利用した料理を提供するなど、旅館と農家が連携体制を構築。</li> <li>・「牛食い絶叫大会」「ゆふいん音楽祭」「ゆふいん映画祭」といった特徴的な地域イベントを開催。</li> </ul>
取り組みのポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・住民にとって魅力的なまちづくりを、実行力あるリーダーと住民の協力により実施し、地域の資産を守りつづけている。</li> <li>・囲い込みを行わず、旅館同士でのレシピ交換や旅館と農家の生産委託契約による連携などにより地域全体の底上げを図っている。</li> <li>・誘客力のある市民参加型のイベントにより、地域外の人々と町民との交流を促進している。</li> </ul>

出典：各自治体ホームページ、国土交通省観光施策ホームページ「観光カリスマ百選」及び本行地域企画チーム編著「錦おりなす自立する地域」「中心市街地活性化のポイント」等を参照の上、筆者作成。



## (2)「体験滞在型観光」による地域活性化事例

観光に対する志向が変化する中、前節で見た「まちなか観光」とともに近年注目されているのが農山漁村などに滞在して作業体験や地域での暮らしを楽しむ観光である。グリーン・ツーリズムに代表されるこのようなタイプの観光を本稿では「体験滞在型観光」と呼ぶことにする。都市圏生活者などが滞在・作業体験等を通じ自然との対話・地域文化とのふれあい・人々との交流を求めて地域を訪れるという、目的意識がよりはっきりとした観光と言える。体験滞在型観光で全国的に注目を集めているいくつかの事例について、各地域における代表的な取り組みとそのポイントを整理したのが図表12である。

### 体験滞在型観光地の例



#### ●飯田市

農産物等活用型交流施設「ごんべえ邑」



#### ●四賀村

滞在型市民農園「クラインガルテン」



図表 1 2 体験滞在型観光による地域活性化事例

1. 秋田県田沢湖町

地域概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>秋田県東部のほぼ中央に位置する人口1万3千人弱のまち。</li> <li>日本一深い田沢湖のほか、高山植物の群生する駒ヶ岳、玉川温泉などを有する自然豊かな地域。</li> </ul>
代表的な取り組み	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本の民謡・民族芸能をベースに舞台活動をしている劇団「わらび座」が近隣農家と連携し、早くからソーラン節の民舞教室や農作業体験などを行う修学旅行の受け入れを実施。</li> <li>受入が本格化してくると農業体験型修学旅行の受け皿組織「田沢湖ふるさとふれあい協議会」を設立し、農業、林業、郷土料理などの多彩なメニューを地域全体で準備。</li> </ul>
取り組みのポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>個々の農家で始められた取り組みを町が支援することで、地域一体となった受入体制が構築されている。</li> <li>受け皿組織において、学校毎に異なるニーズや農家の受入可能性、スケジュールの調整、受入農家の指導等が行われており、体験内容の質の維持と満足度の向上が図られている。</li> <li>訪れた学校との交流を継続的に深め、体験型修学旅行の評価を高めている。</li> </ul>

2. 新潟県東頸城郡6町村（安塚町、浦川原町村、松代町、松之山町、大島村、牧村）

地域概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>東頸城（ひがしくびき）郡は、新潟県南西部、第3セクターほくほく線沿線に位置する人口約2万1千人弱（6町村合計）の地域。</li> <li>全国的に名の知れた観光名所はないが、なだらかな山々と棚田、谷沿いの平地が織りなす「だんだんの風景」が広がり、日本の原風景ともいえるたたずまいを残している。</li> </ul>
代表的な取り組み	<ul style="list-style-type: none"> <li>6町村が連携して、「自然体験」「環境学習」「農業・味覚体験」「スポーツ・アウトドア」などを「越後田舎体験」として用意し、首都圏の小・中学校の修学旅行や体験教育を受け入れ。</li> <li>受入窓口を一本化したほか、旅行代理店を通じた情報発信体制を整備。</li> </ul>
取り組みのポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>農協関係者や地元の元教師などの地域ぐるみの努力により「越後田舎体験」の取り組みが支えられている。</li> <li>日本の原風景とでもいうべき自然風景などの地域資源の良さを再認識し、農業の触りの部分を体験させる疑似体験ではなく、本物の田舎の自然と農業、暮らしを体験できる商品としている。</li> <li>情報発信にあたっては専門家にアドバイスを求め、ターゲットである学校に対して効率的なプロモーション活動を展開している。</li> </ul>

3. 長野県飯山市

地域概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>長野県最北部に位置する人口約2万6千人のまち。</li> <li>中央部を千曲川が貫流し、自然豊かな鍋倉山等を左右に有する。</li> </ul>
代表的な取り組み	<ul style="list-style-type: none"> <li>大規模リゾート開発計画の白紙撤回を行い、ブナ林など自然風景を維持。</li> <li>市域全体を交流・体験のエリアとし、「標高1000mの自然・農作業体験」をテーマとして、グリーン・ツーリズムを展開。</li> <li>市、JA、観光協会が中心となって「飯山市グリーン・ツーリズム協議会」を組成。180人の市民インストラクターを集積。</li> </ul>
取り組みのポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域の資産である自然風景の維持、グリーン・ツーリズムへの取り組みを地域全体で展開している。</li> <li>体験メニュー形成にあたっては都市部の若者をスタッフとして受け入れ、ニーズにあわせた商品化を行っている。</li> <li>統一的な受け入れ機関を創設し、日本生協連や首都圏小中学校など都市部団体等と直接連携を深めている。</li> </ul>

#### 4. 長野県四賀村

地域概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・長野県中央部に位置する人口約6千人の小さな村。</li> <li>・村の面積の85%は山林や原野に覆われている静かな山里。</li> </ul>
代表的な取り組み	<ul style="list-style-type: none"> <li>・準村民としての交流人口増加を目的に「クライנגアルテン」という滞在型の市民農園を建設。</li> <li>・地域に有機栽培を広げ、「ゆうきの里」として地域づくりの取り組みを実施。</li> </ul>
取り組みのポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・村民と利用者との交流が深められるようなプログラム作りがなされている。</li> <li>・都市住民の「有機野菜を自分で生産したい」というニーズに対応してクライングアルテン事業を実施。利用条件を厳格化することで、高い品質と満足度を維持している。</li> <li>・消費者に直接伝わるプロモーション活動を展開している。</li> </ul>

#### 5. 長野県飯田市

地域概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・長野県南部に位置する人口約10万人のまち。</li> <li>・農業が盛んで、りんごをはじめとした多種多様な作物を栽培。</li> </ul>
代表的な取り組み	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校を対象として、飯田の自然や農業に親しむ修学旅行「体験教育旅行」を提案。</li> <li>・I、Uターン希望者を対象として、農繁期を中心に農作業を補助してもらう仕組みである「ワーキングホリデー」を導入。</li> </ul>
取り組みのポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・観光により活性化を図るとい地域づくりへの意識が地域全体で形成されている。</li> <li>・ターゲットを明確にして、疑似体験ではなくありのままの体験（＝本物）というニーズにマッチした商品形成。</li> <li>・「体験教育旅行」「ワーキングホリデー」とも窓口を集約化し、ターゲットを絞った情報発信が行われているほか、リピーターの確保にも努めている。</li> </ul>

#### 6. 大分県安心院町

地域概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大分県中央部から北西部に位置する人口8千人のまち。</li> <li>・町内には3つの河川に沿って農地が広がる。</li> </ul>
代表的な取り組み	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全国に先駆けて「グリーンツーリズム」推進宣言を議決し、町役場に「グリーンツーリズム研究会」を設立。</li> <li>・普通の農家に会員を泊め、農村の生活文化を体感してもらう会員制農村民泊を実施。</li> <li>・景観や自然環境を考える「リバーサイドウォーク」や農村の伝統文化を見直す「全国藁こずみ大会」など、グリーンツーリズムの普及に向けたイベントを開催。</li> </ul>
取り組みのポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小規模な取り組みから、地域の理解を得て、まち全体の取り組みへと拡大させている。</li> <li>・空いている部屋の利用、1日1組以上泊めないことなどをルール化し、一般の農家が抵抗なく事業に参加できるようにしている。</li> <li>・町によるグリーンツーリズム推進係の設置や、県による規制緩和など取り組みへのバックアップ体制が構築されている。</li> </ul>

出典：各自治体ホームページ、国土交通省観光施策ホームページ「観光カリスマ百選」及び本行地域企画チーム編著「錦おりなす自立する地域」等を参照の上、筆者作成。

## 2. 「まちなか観光」・「体験滞在型観光」による地域活性化のポイント

図表11・図表12で取り上げたまちなか観光および体験滞在型観光による地域活性化事例の成功の背景には様々な要因があると考えられる。その中には、それぞれの観光のタイプ・各事例の事情に応じた固有の要因と、各事例に共通する要因とがある。このうち、エッセンスとして他の地域にも参考となる共通要因を整理すると、次の三つが挙げられよう。

### ①地域づくりへの地域全体による取り組み

第一のポイントは取り組み体制である。まちなか観光への取り組み、体験滞在型観光への取り組みとも地域の魅力を高めていくいわゆる地域づくりの一形態にはかならない。取り上げた各事例ともこれらの取り組みを進めるに当たり、地域づくりの一環として行政・関連事業者・住民など地域全体でしっかりと連携が取れている。また、地域の魅力を向上させることは、地域住民自身の意識を高めるとともに、交流人口の増加を通じて地域活力の創出につながるというコンセンサスが醸成されており、地域全体が高いモチベーションを有していると言えよう。取り組みを主導する主体は、行政の場合、商業者・観光関連業者・地域住民等の民間の場合とケースバイケースだが、こうした核となる主体が時間をかけ、ねばり強く官民間・民間での利害を調整し、地域をまとめ上げている。また、強い信念を持ったリーダーたちが強力なリーダーシップで取り組みを支えているケースも多い。特に、体験滞在型観光の場合、行政・業界団体・観光関連業者・地元受入者（農家等）が一体となって運営を行い、受入側とのスケジュール調整やそのサービス水準維持のための指導がなされないと商品として成り立たないと言えよう。

利害対立を超えて地域が一体となるのはそうたやすいことではないが、重要なポイントと考えられる。

### ②地域資源の観光資産化とその質の維持

第二のポイントは、地域資源の活用である。地元にとっては見慣れた景観や当たり前の品、あるいは日常の作業であっても、来訪者にとっては非日常的で興味をそそられるものとなる場合がある。各事例では、こうした地域資源の優れている点を活かしながら、これに新たな魅力を付加し、観光資産として来訪者の期待に応えられるだけの水準を実現・維持している。

まちなか観光の各事例では、武家屋敷等の歴史的建物（角館）、昔話（遠野）、蔵とラーメン店集積（喜多方）、老舗や民家の景観と住民によるフラワーガーデン（小布施）、黒壁建物の景観とガラス工芸（長浜）、自然・農村風景（湯布院）といった個性ある地域資源を守り、また一部は新たに形成しながら、これらをまちづくりに活用している。そこでは、見る・食べる・買う・感じる・交流するといった面で来訪者がそのまちならではの楽しみを享受できる場が用意されており、まち全体として十分時間消費ができる観光資産となっている。逆に、地域住民自身にとっても誇りの持てる質の高いまちになっているとも言え

よう。

体験滞在型観光の各事例では、従来からなされていた修学旅行受け入れを充実していったケース（田沢湖）や、小農園の貸与というドイツの取り組みを新たに導入し発展させていったケース（四賀）など形成過程は様々だが、いずれの事例も創作による疑似体験ではなく、できるだけありのまま、本物の体験を参加者が享受できるようになっている。内容についても農林漁業作業体験、アウトドアスポーツ、食材加工、自然・環境学習など豊富なメニューを用意し選択の幅を広げるとともに、都市部の若者をスタッフに入れニーズをつかむ（飯山）、農業の手法として有機栽培にこだわり都市住民の志向を捉える（四賀）といったことで商品価値を高めている。また、受け入れる側の負担が大きくなったり、地域経済への還元が乏しいと持続的な取り組みとならないが、この点に関しては、農繁期の人手不足対策にする（飯田）、受入人数を限定する（安心院）、農園の利用条件として滞在頻度・期間や資材購入の面で地元への配慮を求める（四賀）といった工夫を施している。そして、むしろこれらは参加者へのケアが行き届く、地域との交流が深まるといった反射的效果を生み、参加者側に安心感・満足感を与える結果になっている。

### ③効果的なプロモーション活動

第三のポイントは、需要を喚起するための地域情報の伝達という点において、直接的できめ細かなプロモーションを怠っていないことである。

まちなか観光の各事例では、旅行代理店・鉄道会社・マスメディアによる広告といったマス対応に加え、個人との直接的なコンタクトを企図するパーソナル対応に注力している。例えば、各地のウェブ情報は、地域情報をワンストップで入手できる拠点、観光スポット・注目店舗等を織り込んだまちなか観光マップ、交通手段・所要時間・テーマに応じたモデルコース、最新のイベント情報、組み合わせ可能な周辺観光地の情報、地域イメージを伝えるための歴史ストーリー等々、内容が充実しており、個人が自由な発想によりオリジナルのスケジュールでまちなかを巡るのに大いに役立つものとなっている。同様に、携帯電話のサイトでも様々な情報の入手が可能である。また、その地に興味を持ち過去に何らかのアクセスのあった人をリスティングし、eメール等により情報発信を行い、リピーター獲得を狙うといった取り組みも行われている。こうした個人向けのメッセージ発信の充実はずしも目新しいものではなく、また、即効性のあるものでもないが、個人が興味に応じて能動的に情報を求めるようになった中では、こうした取り組みをきめ細かく地道に継続することによって着実に効果が上がってくるものと思われる。

体験滞在型観光の各事例でも、体験メニューのトータルな情報を得られる窓口の設置（東頸城郡）、学校・生協などターゲットを定めたPR（飯山ほか）、メーリングリスト（飯田）や会員登録者（安心院）等参加実績がある人のフォローなど、潜在需要を掘り起こすための直接的なアプローチが取られている。

### 3. 「まちなか観光」・「体験滞在型観光」のケーススタディ

本節では、図表11・図表12で取り上げた事例の中からケーススタディとして三つを取り上げ、前節で整理した三つのポイントを踏まえつつ、取り組みの内容を詳しく見てみたい。まちなか観光については、岩手県遠野市、体験滞在型観光については長野県飯田市、四賀村の事例を取り上げる。

#### (1) 岩手県遠野市 ～民話のふるさととしてのまちづくり～

##### ①遠野市の概要

図表13：遠野市基礎データ

面積	660.38km <sup>2</sup>
人口	27,681人
人口増減率 (H7/H12)	△1.7%
高齢者比率	26.9%
就業者数	14,914人
就業構造 第1次産業	24.2%
第2次産業	32.6%
第3次産業	43.1%

出典：遠野市HPより  
数値は平成12年10月1日現在

遠野市位置図

国土地理院承認 平14総複 第149号



遠野市は、岩手県東南部、北上高地の一面の盆地に位置する人口2万8千人弱のまちである。能登地域同様高齢化が進んでおり、高齢者比率は26.9%と全国平均を上回っている。産業は、農畜林業の第一次産業が中心であり、水稻を中心に、葉たばこ、ホップ、野菜等が生産されている。地域には古き良き田園風景が残り、語り継がれてきた素朴な民話をまとめた柳田國男の名著「遠野物語」が日本民俗学の基礎として有名である。

##### ②「民話のふるさと」づくりの背景と主な取り組み

第一次産業中心の山間のまちである遠野では、昭和45年に開催された岩手国体の選手を民家で迎えた際、参加者との交流の中で自分達には見慣れた田園風景や地域文化が観光の対象としてニーズがあるという認識にいたった。そして、これら地域資源を利用し「民話のふるさと遠野」として観光による地域振興が進められてきている。その中から主な取り組みやポイントについて紹介しよう。

### (ア) 田園風景の保存とストーリー性ある散策ルートの形成

遠野では、何気ない田舎風景を魅力的な地域資源と考え、その保存と活動に向けた取り組みを行っている。例えば、茅葺き屋根のため補修・維持に多額の費用を要し年々少なくなっている「南部曲り家」や、田園風景を形づくっていた水車を市が移築・保存し、まちの雰囲気を変えないようにしている。

また、交易地として栄えた象徴である街道筋の石碑や石塔、昔話などにも登場する地蔵、寺社の樹木や淵などの景観が地域住民の協力により昔そのままに残されており、訪れた観光客はなつかしさを感じさせるような雰囲気の中を散策することができる。

そして、遠野の雰囲気をより深く味わってもらうために、「遠野の歴史を訪ねる」「遠野物語を訪ねる」などストーリー性ある散策コースを整備・設定しているほか、廉価で利用できる地域の案内人「遠野ふるさとガイド」を設置し、遠野の歴史などについて詳しい解説を聞き、地域の奥深さについて実感できるような工夫がなされている。

また、昔ながらの風景を守る取り組み自体が、遠野物語の生み出す農村のイメージとともにテレビ等マスメディアを通じて広く報道され、多くの人の興味をひきつけている。

### (イ) 「遠野の生活文化」体験メニューの形成

地域の生活文化を体験できる各種メニューが用意されており、以下で特徴的な二つを紹介する。

#### 「とおの昔話村」と昔話の披露

遠野の地域資源の中で最も有名なのは、佐々木積善が語り、柳田國男が著した「遠野物語」により知られるようになった昔話（民話）である。遠野では古くから地域の風習として昔話を語り継ぐことはあったものの、対外的に話されることはなかった。しかしながら、現在では、市が整備した観光施設「とおの昔話村」や「伝承園」など市内数カ所でその披露が行われている。

その中心となる「とおの昔話村」は、柳田國男が宿泊した「高善旅館」を移築した「柳翁宿（りゅうおうじゅく）」や造り酒屋の蔵を改造した「物語蔵」などにより構成されており、民俗学調査の関連資料や昔話の内容の展示などが行われている。またこれとあわせて語り部による昔話の披露が定期的に行われている。

昔話が披露されているのは、観光物産館2階の「語り部ホール」で、4月から11月までは1日3回（土休日、夏期は5回）、12月から3月までは土休日に1日1回、定期的な公演が開かれている。公演時間は1回約20分から30分で、地域の高齢者が「語り部」として昔話を全て方言で披露した後、方言や話の意味などを聴講者に対して解説、好評を博している。

この「とおの昔話村」での昔話の披露は、次のような特徴を有している。

- ・ハード面は市が整備し、ソフト面では、昔話を熟知し語ることの経験豊かな地元高齢者が「語り部」として市に協力。市と地元高齢者との連携が図られている。
- ・「語り部」に対しては、出演スケジュールをローテーションにより分担することや、少額ながら出演料を支払うシステムを構築することで負担感を軽くし、取り組みを持続的

なものとしている。

- 昔話はテープではなくライブで提供されており、じっくりと聴くことができるちょうど良い時間に設定されている。また、地域に伝わる方言の活用などがなされており、地域を訪れた人の旅情を深め満足感を高めている。
- 公演は予め演目が決められておらず、「語り部」が聴衆に対して訪れた観光地や興味のあるテーマについて問いかけ、その会話の中から聴衆が希望する演目を披露する形式が取られており、「語り部」との交流を楽しめる公演となっている。
- 平成7年には、昔話村内に遠野市民を中心とした研究活動のための「遠野物語研究所」を創設。その活動の一つとして、昔話の「語り部」を育成する「昔話教室」や遠野物語を学習する「遠野物語教室」を開催、市民に対して地域文化の学習機会を提供し、次の世代に向けた後継者の育成も行われている。

●柳田國男が宿泊した柳翁宿



●昔話が披露される語り部ホール



●遠野物語研究所



「遠野ふるさと村」と「まぶりとと衆」

平成8年に市が附馬牛（つきもうし）地区に整備した「遠野ふるさと村」は、江戸時代中期から明治初期にかけて作られた全6棟の茅葺き屋根の「曲り家」のほか、昔の農家にはよく見られた納屋や水車、土蔵といったものを移築保存・復元させた観光施設である。

このふるさと村では、再現された遠野の原風景を散策しながら楽しむことができる。

また、「曲り家」には遠野の言葉で「守る人」を意味する「まぶりとと衆」という暮らしの知恵を伝える地元高齢者が常駐しており、訪問客はいろいろ端で休んだり、「竹はしづくり



体験」、「そば打ち体験」、「わら細工体験」など20種類以上用意されている地域文化の体験メニューを教わったり、まぶりっとと昔の遠野の話や方言を楽しむ中で交流を深めながら、地域文化について聴き、知ることができるようになっている。

この「遠野ふるさと村」は、次のような特徴を有している。

- ・ハード面は市が整備し、ソフト面では、市から協力を要請された地元附馬牛（つきもうし）地区の老人クラブ「早池峰の会」の人々が「まぶりっと衆」として参加するなど、市と地域住民との連携により観光施設が運営されている。訪問客は観光施設を訪ねながら地域住民との交流を深め、地域のありのままを実感することができるようになっている。
- ・「まぶりっと衆」は老人クラブのメンバーがローテーションで勤めているが、活動内容はほぼ自由で、畑仕事をしたり、自ら作ったわら細工の土産品を販売するなどして小遣い程度の収入をあげている。このように、協力している住民に対して自主的な活動を認め、やりがいなどを喚起させることにより、継続的な参画を可能にし取り組みを維持する工夫がなされている。
- ・滞在中の体験内容を見てみると、訪問客は、施設見学だけではなく、「わら細工体験」のような地域ならではの体験プログラムにじっくりと取り組んだり、「まぶりっと衆」と直に接することにより、地域を訪れた実感を深められるようになっている。

●遠野ふるさと村に再現された原風景



●伝統的な農家の建物・南部曲り家



### (ウ) 遠野のプロモーション活動

「民話のふるさと」としてイメージづけるためのプロモーション活動が様々な形で行われている。図表14はその主なものである。

図表14：遠野における主なプロモーション活動

情報発信ツール	主な取り組みと特徴
ホームページ	「遠野物語ゆかりの地の紹介や目的ごとに分けたコースの紹介」「市内観光マップの提供」「昔話披露のスケジュール」「旬の地域情報の発信」などが掲載されており、計画を作る上で必要な情報が揃っている。
道の駅 「遠野風の丘」	風の丘では、地域の観光情報及びグリーンツーリズムに関するインフォメーション機能が整備されておりワンストップで情報収集を行うことができる。また、地元の生産品を購入できる産地直売施設や地元の食を手軽に楽しむことができる「夢咲き茶屋」を併設している。
イベント	昔話をじっくりと聞くことができる「遠野昔ばなし祭り」、市民主体で遠野物語にちなんだ劇を披露する「遠野物語ファンタジー」などのイベントが行われている。また「遠野ふるさと村」「伝承園」など市が整備した観光施設では、季節に応じた祭りの披露やイベントが開催されている。
アンテナショップ	東京都武蔵野市において、武蔵野市の友好都市5町村とともに、アンテナショップ「麦わら帽子」を出店。産地直送の農作物などを販売するほか、毎月遠野に関するイベントを開催している。
ガイドブック	遠野の歴史や文化などを紹介するハンドブックサイズのオリジナルガイドブックを発行。
携帯電話	携帯電話会社の情報ダイヤルにて、遠野の昔話を聞くことができる番組を提供。

出典：遠野市、遠野市観光協会及び社団法人遠野ふるさと公社のホームページ、作成資料等を参照の上、筆者作成。

これら取り組みは次のような特徴を有している。

- ・情報発信の媒体を多角的に多数用意し、様々な分野・様々な層に訴えて遠野への関心を喚起している。
- ・発信内容を見てみると、目的に応じた自由な行動の手助けとなる現地情報が集約されている。団体のみならず個人・小グループの観光客でも計画を立てられるよう必要な情報が発信されている。
- ・情報はそれぞれ「遠野ならでは」の要素を多く取り込んでいる。他の地域と何が違うのか、どういうことができるのかをはっきりと示した内容となっている。

#### ●夢咲き茶屋（遠野風の丘）



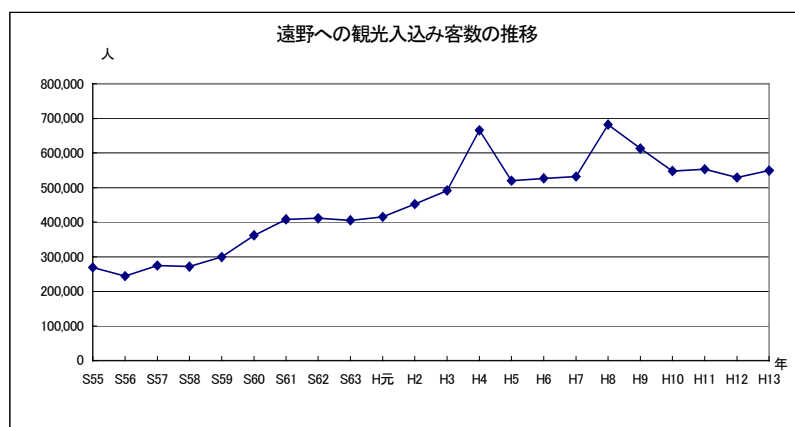
#### ●グリーン・ツーリズム情報掲示板（遠野風の丘）



### ③遠野への入り込み状況

以上見てきたように遠野では、訪れた観光客が「民話のふるさと」として遠野の良さを、自ら田舎風景の中を「歩く」、昔話を「聴く」、地元の高齢者と「話す」、わら細工などを「作る」等の行動を通して体験できることに重点を置いてきたほか、住民との交流を通して、できる限りそのままの地域に触れることができる「質」を維持してきている。これにより、東京から新幹線を利用して約4時間半を要するなど、決して大都市圏からの交通の便が良いところではないにもかかわらず、観光客数は着実に増加している（図表15）。

図表15：遠野市への観光入込み客数の推移



出典：遠野市観光推進計画より

(注) 平成4年・8年の増加は近隣地での大型イベント開催が影響。なお、計数には平成10年にオープンし、平成11年道の駅として指定された道の駅「遠野風の丘」への入込み客数（平成13年入込み客数約95万人）は含まれていない。

## (2) 長野県飯田市 ～体験教育旅行、ワーキングホリデーの取り組み～

### ①飯田市の概要

図表16：飯田市基礎データ

面積	325.35km <sup>2</sup>
人口	107,381人
人口増減率 (H7/H12)	0.6%
高齢者比率	24.1%
就業者数	58,984人
就業構造	
第1次産業	10.9%
第2次産業	36.5%
第3次産業	52.5%

出典：飯田市HPより  
数値は平成12年10月1日現在

飯田市位置図



飯田市は、日本のほぼ中央・長野県南部に位置する人口約10万人のまちである。東に南アルプスと伊那山脈、山すそは扇状地と段丘が広がり、豊かな自然と優れた景観に恵まれ、四季の変化に富んでいる。また、農業が盛んで、各種作物の南限、北限となっており、りんごをはじめ多種多様な作物が栽培されている。

### ②地域づくりの背景と主な取り組み

飯田へは、自動車・バスの利用により東京・大阪からそれぞれ4時間を要する。際立った観光資産がなく通過地化しており、地域に滞在してもらうためのメニュー形成が課題となっていた。また、主産業である農業は、農村部での高齢化が進み、繁忙期に労働力をどのように確保するのかが切実な問題となっていた。

飯田ではこのような問題への対応として都市との交流を進めることに活路を見出した。以下では、代表的な二つの取り組みを紹介する。

#### (ア) 地域を体験する旅行の提案 ～「飯田市体験教育旅行」～

飯田では、中学校および高校を対象として、地域の産業を体験する修学旅行「飯田市体験教育旅行」を企画した。

このプログラムでは、図表17をはじめとした約200もの体験プログラムの中からメニューを選択し、目的に応じたオリジナルの体験を組み込んだ修学旅行をアレンジすることができるようになっている。実際には、各学校は2泊3日の日程で飯田に滞在し、農家への民泊、旅館等への宿泊を1泊ずつ行い、2つあるいは3つの体験プログラムをこなすケースが多いという。

図表 17：飯田市体験プログラムの一例

体験プログラム	時期	所要時間	上限人数	体験プログラム	時期	所要時間	上限人数
乗馬	通年	5	36	そば打ち	通年	3	40×3
万古溪谷沢渡り	5～11月	6～8	100	苳ジャムづくり	2～6月	2	40
ラフティング	4～11月	4	140	草木染め	通年	4	20×2
溪流釣り	3～9月	4	60	阿島傘づくり	通年	4	20
森林営林作業	通年	4	20×3	機織り	通年	4	20
稲刈り	9月上～10月上	3	100	水引工芸	通年	1～3	150
きのこ菌打ち	4～6月	2	100	環境学習 稀少種探訪	3～10月	4	20
酪農体験	通年	4	8×5	山里体験の旅 炭焼き	通年	4	10×5
五平餅づくり	通年	3	250	ドングリの森づくり	5～10月	3	50
よもぎ餅づくり	4～10月	3	20×3				

出典：飯田市作成パンフレットより

近年このような体験型の修学旅行は全国各地で行われているが、下記のような点で飯田の取り組みは特徴的であると考えられる。

- ・市の職員が市内及び隣接地域をまわり体験メニューや人材の発掘、インストラクターの資質向上に積極的に取り組んだ結果、住民の協力も得ることとなり、体験プログラム数200、受入民家数400戸という充実した受け入れ態勢を構築している。
- ・提供する体験メニューは、短時間で簡単にできる疑似体験ではなく、訪問客ができる限り生産現場に入るなど、地域の産業や文化をあるがままに体験できる内容となっており、質の高さを求める最近のニーズに適合している。
- ・農家への民泊については、1農家あたりの受入を最大でも4名程度に制限するなど、人と人との交流が促進されるような内容に作りあげており、参加者から高い評価を受け、体験終了後もそのつながりが維持されている。
- ・受入にあたっては、飯田市のほか周辺市町村などによって設立された「株式会社南信州観光公社」が窓口となり、各種情報の提供、受け入れ先との調整が一元化されている。
- ・当時（平成7年）としては珍しく、ターゲットとなる学校に対して提案を行うべく、市が自ら学校関係に強い旅行代理店へプロモーション活動を展開している。

#### （イ）援農による都市農村交流 ～「ワーキングホリデーいいだ」～

飯田では、農繁期の人手不足を発端として、「援農」という概念に注目し、宮崎県西米良村の取り組みを参照とした「ワーキングホリデー」の取り組みが行われている。

「ワーキングホリデーいいだ」は、Uターン・Iターン希望者など、農業や農村に関心を持ち、本気で農作業をしてみたいと希望している人々を対象に、最も繁忙になる春と秋を中心に1年間を通じて開催されている。基本的なシステムとしては、図表18の参加マニュアルの通り、参加者は、飯田市農政課内に設置されているワーキングホリデー事務局に参加希望を出し、農政課から紹介された農家に交通費自己負担で訪れ、図表19のような農作業をボランティアとして行うものである。受け入れる農家は、参加者の道具や食事、宿泊場所を提供することとなっている。

図表 18：ワーキングホリデー参加マニュアルの抜粋

参加資格	<ul style="list-style-type: none"> <li>「南信州ワーキングホリデーいいだ」登録申込書に偽りなく記載し、誠意を持って農家の手伝いをしてくれる方で、16歳以上の農作業ができる方なら、年齢性別を問いません。</li> </ul>
期 間	<ul style="list-style-type: none"> <li>基本的に1年間を通して受入をしていますが、農作業が無い場合は受入できません。滞在日数はイベント開催（春・秋）の3泊4日を標準としていますが、農家との個別調整で変更可能です。</li> <li>長期滞在は概ね、1ヶ月を目途として更新をお願いします。</li> </ul>
受入農家の様子	<ul style="list-style-type: none"> <li>普通の農家の生活に入りますので、農作業時間は各農家により異なります。</li> <li>農作業は多種にわたり、いろいろな仕事がありますが、熟練しないとできない作業が多くお手伝いいただく内容に限られていますので、ご容赦下さい。</li> <li>夜は大変静かで川音や動物、夜鳥の声しか聞こえない地区もあります。天気であれば夜の星空は大変きれいです。</li> </ul>
持ち物	<ul style="list-style-type: none"> <li>農作業時は、動きやすく少々汚れてもかまわない服装を各自でご用意下さい。</li> <li>タオル類、シャンプー、リンス、寝間着、帽子、洗面用具等をご持参下さい。</li> <li>寒暖の差が激しく、夜になると冷え込みます。一枚余分に着る物をおすすめします。</li> <li>農作業に必要な用具（手袋、長靴等）は農家で用意します。</li> </ul>
保 険	<ul style="list-style-type: none"> <li>参加者全員ボランティア保険（1年間有効）をかけさせていただきます。</li> <li>2年目からは参加されたときより保険を掛けさせていただきます。</li> <li>他の市町村や様々なボランティアでも利用できます。旅行保険ではありませんのでお気をつけください。</li> </ul>
その他留意点	<ul style="list-style-type: none"> <li>農家がお忙しいときにきていただく援農（農業サポーター）制度でありますので、お客様扱いはいたしません。農作業の出来ない方は、農家に滞在できません。</li> <li>農家普段の私生活に入ってください。食べられない物や聴きたいことは言ってください。お互いに遠慮があると、本当の交流ができず、双方が不完全燃焼でよくありません。</li> <li>食事は、各農家で一緒に用意し、食べることが原則ですが、場所により集落で交流会をする地域もあります。こうした機会に田舎の料理を一緒に作り、覚えることをおすすめします。</li> <li>公共交通機関でお越しのお客様は、農家が最寄りの駅またはバスターミナルまで送ります。車でお越しの皆様は農家が飯田インターまで先導します。事前に帰りの計画を農家とご相談ください。</li> <li>春秋開催のイベント開催に限り、農家・参加者の交流会を行います。実費（安い会費でやります）をいただきます。</li> <li>定住・就農他どのようなご相談にも応じます。事務局にお気軽にお尋ね下さい。</li> </ul>

図表 19：ワーキングホリデーモデル作業例

期間	作業内容	期間	作業内容
4月初～5月初旬	いちご収穫	8月下～9月下旬	葉摘み、梨収穫
4月末～5月初旬	りんご摘花、梨花粉付け	9月中～9月下旬	梨、りんご収穫
5月初～5月中旬	田植え、茸菌打ち	10月初～10月中旬	りんご（ふじ）収穫
5月中～6月初旬	りんご摘果	10月下～11月初旬	干し柿 (収穫、皮むき、吊し)
6月初～6月中旬	梨袋かけ		

出典：飯田市作成資料より

このワーキングホリデーいいだの取り組みは、飯田の実状にあわせた工夫を加えることにより、参加者との間で深い交流が図られている。そのポイントとなっているのは次のような点であると考えられる。

- このような取り組みを行う場合、外部から人を受け入れることについては否定的な意見が各地で見られる。しかしながらこの点、飯田では市の職員が積極的に地域住民の輪の中に入って、地域の問題を地域で考える「集落複合経営」の考え方を浸透させていった。これにより、地域全体で都市と農村との交流に対する理解が深まり、幅広い受け入れ態勢が市と地域住民の協力により構築されている。
- 農業体験は体験内容のレベルが様々でいざ参加した時に、求める内容と違ったりする場合も多く見られる。その点飯田では、受け入れルールをマニュアルで明確化することに

より、農家・参加者ともお互いの状況を理解した上で体験、交流を行っており、農家側の負担軽減と参加者の満足度向上が果たされている。

- ・また、飯田市が窓口として参加者と農家の間を取り次ぎ、参加者へのボランティア保険の付加を行うなど、取り組みへの安心感が提供されている。
- ・情報発信の面でも、登録された参加者に対して、事後的にもメーリングリストなどを用いて地域情報や次回開催情報を配信し、興味ある層とのつながりを深めることでリピーター獲得につながっている。

### ③「体験教育旅行」「ワーキングホリデーいいだ」への参加状況

以上のように飯田では、地元の住民の協力を得てしっかりと受け入れ態勢を構築し、質の高いありのままの体験を提供している。その結果、「体験教育旅行」、「ワーキングホリデー」とも評価が高まり、年々参加者が増加している。

今年で8年目を迎えた「体験教育旅行」への参加状況は、取り組み初年度（平成8年）は8団体1,000名であったものが、毎年参加団体数、人数ともに増加して、平成14年には198団体、17,000名を受け入れるまでに成長している（図表20）。

また、「ワーキングホリデー」についても、無償ボランティアで観光は一切なし、交通費は自前と厳しい条件であるにも関わらず、平成14年の受入実績は243名、延べ日数にして980日に達しているほか、参加登録者数も714名となるなど、その取り組みが定着してきている（図表21）。

また、リピーター率は「体験教育旅行」で20～30%、「ワーキングホリデー」で50～60%と高い水準にあり、参加後にも飯田のファンとして定着している点が特徴的である。

図表20：飯田市体験教育旅行受入実績

年	団体数	人数	のべプログラム利用人数
平成8年	8	1,000	—
平成9年	18	2,300	—
平成10年	28	5,000	—
平成11年	48	6,000	—
平成12年	85	8,000	12,000
平成13年	145	10,000	23,000
平成14年	198	17,000	35,000

出典：飯田市作成資料より

図表21：ワーキングホリデーいいだ参加状況

受入農家数	74戸
参加登録者	714名
参加者地域別	関東 425名、関西 139名 中京 123名、長野 11名 山梨 3名、北陸 3名、東北 7名 中国・四国 8名、九州 5名、
受入実績	平成10年 32名（延べ 96日） 平成11年 187名（延べ 888日） 平成12年 219名（延べ 909日） 平成13年 151名（延べ 618日） 平成14年 243名（延べ 980日）

出典：飯田市作成資料

### (3) 長野県四賀村 ～滞在型市民農園（クラインガルテン）による地域交流～

#### ①四賀村の概要

図表 2 2 : 四賀村基礎データ

面積	90.25km <sup>2</sup>
人口	6,108人
人口増減率 (H7/H12)	△4.2%
高齢者比率	12.5%
就業者数	3,023人
就業構造 第1次産業	12.5%
第2次産業	35.4%
第3次産業	51.9%

出典：四賀村HPより  
数値は平成12年10月1日現在

四賀村位置図



四賀村は、長野県中央部に位置する人口約6千人の小さな村である。村の面積の約85%は山林や原野に覆われており、四方を山に囲まれている。村内から北アルプスを展望することができる静かな山里である。

アクセス手段は自動車を中心であり、中央自動車道・長野道を利用し、東京から約3時間、大阪から約4時間半を要する。

#### ②地域づくりの背景と主な取り組み

四賀村は、江戸時代には宿場町として栄えたが、現在目立った観光資源は存在していない。また産業は、かつて養蚕業が盛んな地域であったが現在は衰退し、残された約150haに及ぶ広大な荒廃農地の有効活用が大きな課題となっていた。

そこでこの荒廃農地に、滞在しながら有機栽培による農業やガーデニングを楽しむことができる「クラインガルテン」とよばれる施設を整備し、村民と都市住民との交流事業を進めている。以下ではこの取り組みについて紹介する。

##### ●クラブハウス



##### ●クラインガルテン・ラウベの例





クラインガルテンとは、ドイツ語で「小さな庭」を意味し、日本では主にラウベ（休憩小屋）付きの滞在型市民農園を指している。四賀村には「坊主山クラインガルテン」と「緑ヶ丘クラインガルテン」という二つのクラインガルテンが建設されており総称して「信州四賀村クラインガルテン」と呼んでいる。両クラインガルテン共に、ラウベ付きの市民農園と利用者の共用施設であるクラブハウスにより構成されており、利用者に提供される個々の敷地面積は270～300㎡、畑面積は100～120㎡、平成15年3月末現在坊主山で53区画、緑ヶ丘で52区画の合計105区画が利用されている。

「信州四賀村クラインガルテン」の主な利用条件を整理したのが図表23である。四賀村のクラインガルテンの主なシステムとしては、参加者が村の整備したラウベ（作業小屋）付き市民農園を一定の条件の下借り受け、滞在しながら農作業を楽しむものである。四賀村のラウベには必要最低限の居住設備も整えられており、長期の滞在も可能となっている。

図表23：信州四賀村クラインガルテンの利用条件

貸貸条件	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ガルテナーと村との契約は1年契約であり、利用料金は一箇所あたり10～36万円、そのほか光熱水費は実費となっている。通常は5年まで更新可能で、利用状況が良好なガルテナーは再契約も可としている（ただし、農園の管理が適正でない場合には、一方的に解除されることもある）。</li> </ul>
利用条件	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ クラインガルテンの区画内における花・野菜作りは有機無農薬農法で行うこと</li> <li>・ 冬季期間を除きクラインガルテンを1ヶ月3泊ないし6日以上利用し、草むしりなど必要な手入れを行うこと</li> <li>・ クラインガルテンで必要な日用品、資材等は村内で調達すること</li> <li>・ クラインガルテン区画の美しい庭づくりを積極的に行えること</li> <li>・ 倶楽部の年間プログラムに参加する意志があり、倶楽部内、村内の交流事業に参加する意志のあること</li> <li>・ 信州四賀村クラインガルテン倶楽部憲章を遵守すること</li> </ul>
バックアップ体制	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ バックアップ体制としては、月1回の交流行事、有償での有機栽培の個別指導、農具のレンタルややむを得ない場合の農園管理、倶楽部会報の発行などを行う「信州四賀村クラインガルテン倶楽部」や、1区画に対して1農家がボランティアとして野菜づくりや収穫の時期などのアドバイスを行う「田舎の親戚制度」などが整えられている。</li> </ul>
入会選考	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 入会希望者には、必ず現地には一度は足を運ぶことを義務づけるほか、申し込みの際には「月にどのくらい利用できるか」「畑作業にどのくらい意欲があるか」「食材の安全性や環境問題にどのような意見を持っているか」などをレポートで提出し、ガルテナーの選考を行っている。</li> </ul>

出典：信州四賀村クラインガルテン倶楽部ホームページ等を参照の上、筆者作成。

このクラインガルテンの取り組みは、近年全国各地で行われてきている。その中でも、四賀村の取り組みは先進的な取り組みと言え、次のような特徴を有している。

- ・ ハード面は村が整備するが、運営にあたっては、農協や有機栽培に取り組む民間団体、田舎の親戚と呼ばれる補助農家などが協力してガルテナーを支援するなど、地域全体で取り組みが行われている。また、クラインガルテンでは月1回村のイベントを開催し、ガルテナーと村民との交流を促していったことが奏功し、現在では、村と地域住民が連携してクラインガルテンを盛りたてている。
- ・ 利用条件の中でガルテナーが各自責任をもって畑の管理を行うために、地元側で草取りなどはしないよう定めているほか、ガルテナーの排出するゴミは各自持ち帰りを義務づけるなど、クラインガルテン運営にかかる村側の負担を軽くし持続可能な取り組みとし

ている。

- ・厳しい利用条件と入会審査を設定することで真剣な参加者を募ることにより、ガルテナーと「田舎の親戚」の農家との交流およびイベントや物品の購入を通じたガルテナーと住民との交流が深められている。
- ・また、栽培方法を有機農法に限定することで、消費者の食に対する安全性などのニーズに応えた取り組みとし、プログラムの付加価値を高めている。
- ・プロモーション活動については、開始当初に主に農業・自然を趣味としている人が購読している雑誌へ広告を打ち、特定の客層に対して直接的な情報発信を行うことにより、効果的に求める人材を募っている。その後は、斬新な取り組みを取り上げた雑誌やテレビなどによる情報発信や、口コミで情報が伝わり広く知られるようになっている。

#### ●ゲストハウス内



#### ●共用スペース



### ③クラインガルテンの参加状況

以上のように四賀村のクラインガルテンでは、単純に市民農園を賃貸して人を呼び込むだけではなく、村をあげてその活動を進め村民と参加者との交流の機会を増やしているほか、有機というこだわりの栽培を可能にすることで、他地域にはない取り組みとなっている。

その結果、利用状況は、平成6年4月利用開始以来毎年、募集人数の3倍から4倍の希望者が応募しており、入居率100%と高い人気を保ち続けているほか、年間視察者が1万人近くに達するなど、四賀村の知名度を向上させる効果を上げている。

### 第3章 能登地域の観光振興について

前章では、まちなか観光・体験滞在型観光による地域活性化事例を見た上で、これらに共通する成功要因について整理してみた。そして、共通要因として、①地域づくりへの地域全体による取り組み、②地域資源の観光資産化とその質の維持、③効果的なプロモーション活動という三つを抽出した。これらは、能登地域でこうしたタイプの観光に取り組んでいく上でも基礎になるポイントと考えられる。

本章では、能登観光の今後の方向性について、これまで見てきたまちなか観光・体験滞在型観光の深化という視点から考察してみたい。現在の能登観光に関しては、金沢・加賀温泉郷とのセットで、和倉温泉と輪島の朝市を組み合わせたコースが主流と考えられるが、観光のパーソナル化の中にあっては、既存コースに加え、まちなか観光・体験滞在型のようなタイプの観光を深化させていくことで能登観光の幅がより一層広がると考えられる。以下ではまず能登地域の資源を改めて整理した上で、これらを活かしたまちなか観光・体験滞在型観光を組み立てていく際の具体的な切り口を前述の三つのポイントに従って示してみたい。

#### 1. 能登地域の資源の再整理

能登地域の資源を改めて見てみると、歴史・伝統・文化に根ざしたものが数多くあるほか、地理的背景から海・山双方の自然の恵みも豊富である。これらに関しては、それぞれ魅力を持つ素材である一方で、単体で多くの人を呼べるほどの傑出した観光資産は少ないと言わざるを得ない。しかしながら、まちなか観光や体験滞在型観光に関しては、先に見たように必ずしも第一級の観光資産を多数必要とするものではなく、来訪者がそれぞれの関心事において「能登らしさを満喫できた」、「能登ならではの体験ができた」と体感できる空間あるいは時間を提供することこそが観光資産であると言える。以下ではこのような観点から活用可能性のある能登の資源の例を確認してみる<sup>(注6)</sup>。

##### ①祭り

各々の規模こそ小さいものの、地域ごと季節ごとバラエティー豊かな祭りが数多く行われており、その中でもとりわけ名が知れているのが、夏祭りとしての「キリコ祭」である。「キリコ」というのは、祭りの際に神輿のお供として担ぎ出される巨大な御神灯「切子燈籠」を縮めた呼び名である。毎年7月7日、8日に能都町宇出津で行われる「あばれ祭り」を皮切りに10月中旬にかけて能登（特に奥能登）中の各地でそれぞれ地域固有のキリコ祭りが行われている。場所にして100箇所余り、キリコの数にすると700～800にもものぼる。

---

(注6) 各資源の詳細については参考資料2を参照されたい。

## ②神事・風習

広く一般に公開されているものではないが、能登地域の風土を今に伝える神事、風習などが現在まで受け継がれている。

代表的なものとしては、目には見えない田の神を実際にいるかの如く接待し感謝の意を表す「アエノコト」のほか、仮装変装の客人（まれびと）神を迎える風習である「アマメハギ」、「面様年頭」といった神事などが行われており、国重要無形民俗文化財に指定されている。

## ③民話・民謡

悪者の猿鬼を神々が退治するという「猿鬼伝説」などの民話が各地域に残るほか、小麦粉曳きの作業唄として門前町七浦地方を中心に歌い継がれてきた「能登麦屋節」や輪島地方に伝わり仕事始め、祭礼、婚礼などめでたい席で歌われる「輪島まだら」などが今に伝えられている。

## ④歴史

能都町で発掘された「縄文真脇遺跡」に代表される縄文時代栄えた集落の存在、高麗人や渤海使の渡来など朝鮮半島との交流の歴史、壇ノ浦の合戦で破れ能登へ流刑となった平時忠（平清盛の妻の兄）とその末裔で奥能登の豪家として栄える時国家にまつわる歴史、源頼朝により追放となった源義経に関する伝説などを背景とした歴史ゆかりの地が地域内に点在している。

### ●キリコ祭（輪島大祭）



### ●時国家の屋敷（上時国家）



## ⑤芸術

文学では、古くは大伴家持から近代では与謝野鉄幹、高浜虚子、折口信夫など多数の俳人、歌人が能登を愛でた作品を詠んでいるほか、小説でも松本清張作「ゼロの焦点」などが有名である。

美術としては、七尾の生まれで16世紀桃山時代の画聖長谷川等伯が、数多くの名作を世に送り出しており、その作品の一部は羽咋市や七尾市の寺院にも残されている。

また最近では、仲代達也氏主宰の劇団「無名塾」が中島町で合宿を行っていたことをきっかけとして、北陸唯一の演劇専門ホール「能登演劇堂」が建設されており、無名塾のロングラン公演や各種演劇の公演が行われている。

## ⑥寺社

能登地域には約600～700もの寺社が存在している。

代表的な寺社としては、1320年に開創された曹洞宗の祖院である総持寺（門前町）のほか、万葉集にも登場し縁結びの神様として有名な気多大社（羽咋市）、北陸における日蓮宗の本山妙成寺（羽咋市）、前田家ゆかりの寺院が集まった山の寺寺院群（七尾市）などがある。

## ⑦伝統工芸

地の粉を用いた堅牢な下地塗りと優美な沈金、蒔絵の技術が名高い「輪島塗」や豪華な彫刻が特徴的な「七尾仏壇」のほか、渋い黒灰色の自然釉が特徴の「珠洲焼」が国や県の指定を受けている。このほか、手づくり技術で作られる「七尾和ろうそく」、鹿西町の最高級麻織物「能登上布」、田鶴浜町の「建具」などが有名である。

●総持寺山門



●和ろうそく店（七尾市内）



## ⑧まちなか・農漁村風景

輪島や七尾をはじめとした各地に、今もなお歴史的なまちなみや店舗、朝市などの生活風景が残されている。また、農村部においても、輪島市白米には千枚田（棚田）が、大沢地区には細い苦竹を隙間なく並べた「間垣」が集落単位で残されているほか、地域内各地に茅葺きの民家、水田、塩田など生活に根ざした風景が広がっている。

## ⑨自然風景・自然資源

富来の巖門、曾々木の窓岩、珠洲の千畳敷、九十九湾などすでに観光地として有名になっている自然景観のほか、日本の名水百選にも選ばれている古和秀水、ヒバ（能登の方言でアテ）の森林、藻類の死骸が海底や湖底に長年にわたって堆積してできた珪藻土、外浦地方の夕日など固有の自然資源、景観が豊富に存在している。

## ⑩農漁業産品

農作物としては、主産品である米のほか、特殊産品としてブルーベリー、小菊かぼちゃ、いちご、能登白ねぎ、りんご、メロン、松茸、椎茸、など比較的多様な作物が栽培されている。また、最近では、地域で伝統的栽培されてきた中島菜や沢野ごぼうなどが健康食品として注目を集めている。漁業ではブリ、タラ、マダイ、アジ、サバ、スズキ、イワシ、イサザなどの魚のほか、貝類ではカキ、サザエなど豊富な魚介類が水揚げされる。

## ⑩食、加工食品

朴の葉の上にきな粉をまぶしたご飯「朴葉飯」、鯛とおからを使った「卵の花寿司」、ところてんに似た料理「すいぜん」など多彩な郷土料理が存在している。

また特産品としては、イワシやイカを素材として作られる魚醬「いしる」や日本唯一の揚げ浜式製法で作られる自然塩、地酒、漬物、魚保存食、岩海苔などが特産品となっている。

### ●白米の千枚田



### ●すいぜん



## 2. 能登地域の資源を活かしたまちなか観光・体験滞在型観光の切り口

次に、このような地域資源を活用し、能登地域内の各地でまちなか観光・体験滞在型観光をどのように深化させていくかという点について先に見た事例を参考にして考察してみたい。ここでは先に述べた三つのポイントに従ってどのような対応があり得るかを具体的に整理してみる（なお、ここでの整理は、各地でその事情に応じた具体策を組み立てる際の「切り口」の例示であり、また、能登地域内の特定地区での取り組みを想定したものではない）。

### ①地域づくりへの地域全体による取り組み

能登各地の取り組みについて、それぞれをその地域全体のものにして活動のモチベーションを高め、これにより来訪者へのホスピタリティを向上させるためにはどのような点に留意する必要があるだろうか。これまでに見た事例を参考に整理すると次のようになるだろう。

- ・地域づくりのコンセプトは、その土地らしさを活かした地域アイデンティティ・地域ブランドの形成につながるような、地域全体が共有できるものとなっているか
- ・自治体、業界団体、農林水産業者、商業者、地域住民などの総力を結集するため、活動の中核主体やリーダーは、活動の成果が地域全体の底上げになるということを客観的に分かりやすく説明しているか（特に、地域の文化・伝統産業等を観光に結びつけることに消極的意見がある場合など）
- ・逆に、各地域主体は、まちなか観光・体験滞在型観光のための地域づくりが交流人口の増加につながり、地域に活力をもたらすことを理解しているか
- ・地域全体（特に活動の中核主体やリーダー）がまちなか観光・体験滞在型観光に関するノウハウを高めているか（先進地のリーダー等から具体的な話を直接聞くなどのより実地的な情報を得ることが必要）
- ・女性や高齢者にも活動の担い手として加わってもらうような工夫がなされているか（都市からの来訪者を地元の文化や料理などにより「もてなす」という点で、こうした層の経験や叡智が大いに役立つほか、住民構成上の必然性もあり）
- ・活動の持続性という点で、次世代の担い手を育成していくための工夫がなされているか、地元側が過度の負担を負わないような工夫がなされているか

これらの前提が整えば、活動の中核主体が各地の情報を取捨選択しながら地域事情に応じた具体的方策を練り上げつつ、その他の主体もそれぞれが自らできることを協力し主体的に活動に参加するという好循環につながろう。

## ②地域資源の観光資産化とその質の維持

次に、能登の地域資源を活用した観光資産の形成について考えてみる。まず、留意点を整理してみよう。

- ・地元ではありふれたものであっても、都市からの来訪者には魅力あると考えられる素材を見過ごしていないか（前節で見たように能登にはこうした資源が遍在しており、観光面での潜在力は高いと言えよう）
- ・これら素材の組み合わせによって形作られた観光資産（ハードだけでなく付随するサービス、あるいはその地の空間や時間消費の対象など広い意味で）は、来訪者がイメージしていた能登らしさ、能登ならではの体験を提供しているか
- ・観光資産は、各地を来訪して目が肥えている都市生活者等が満足できるレベルにあるか、またそれを維持しているか（本物・リアル感・旅情の提供、ストーリー性の付与、地域との適度な交流の提供、情報のワンストップサービスや丁寧な現地情報など十分なホスピタリティ）
- ・同様の観点で、外部の目線や特に女性・若者などの感覚を活かそうとしているか

次に、こうした観光資産を形作る際の切り口を前節で見た素材を参考にいくつか例示してみたい。ここでは、「能登」から想起されるイメージを癒し・のどかさ・美しさ・なつかしさ・食材のおいしさ・文化伝統の奥深さなどとする（もちろん、地域イメージは能登内でも土地ごとに異なるものであり、また、ここで挙げたものに限られるものでもない）。その上で、こういったイメージに応じた活動を組み立てる際に軸となるコンセプト、これによる具体的な取り組みの例を挙げてみたのが図表24である。実際に各地でどのような取り組みがあり得るかという点は、勝れてマーケティングとアイデアの問題であり、各地の力量が問われることになる。



図表 2 4 : まちなか観光・体験滞在型観光の観光資産を形作るための切り口 (例示)

地域づくりの軸となるコンセプト (例示)	具体的取り組み (例示)
「歴史的景観や情緒ある風景を守ろう。」	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 地元産の黒い能登瓦や古い建築様式の建物、朝市などの生活風景を荒廃させることなく維持、まちの景観も統一。建物の歴史や由来についての説明を加えたマップ等を用意し、まちの雰囲気味わってもらおう。(まちなか観光)</li> </ul>
「地域の文化、歴史を伝えよう。」	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 渤海使との交流による伝承や地元の民話の語り部を置き関係する名所旧跡と組み合わせ、見るだけでなく聞くことによって体感を深めてもらう。(まちなか観光)</li> <li>● キリコ祭りなど地元の祭りに住民と一緒に参加できる機会を提供。祭りの見物客としてだけでなく、地元住民宅に滞在してもらい地元との交流を重視。滞在中に地域の伝統文化や豊かな自然などをより深く体感してもらう。(体験滞在型観光)</li> </ul>
「伝統工芸品になじんでもらおう。」	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 伝統工芸品の工房や販売店において、職人や専門家から本物の見分け方や品質の違いなどの詳しい解説をじっくり聞いてもらう機会を定期的に提供。伝統工芸品への理解と職人との交流を深めてもらう。製品についても、洗練された都市住民、女性、若者の志向に合うタイプのを企画開発する。(まちなか観光)</li> <li>● 伝統工芸品の製作に取り組んでみたい人向けに、職人の協力を得て基礎技術の習得機会を提供する。豊かな自然に囲まれた能登の地で日常を忘れ数日間製作に没頭できる時間を持ち、自作品を仕上げてもらおう。(体験滞在型観光)</li> </ul>
「おいしく安全な食を提供しよう。」	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 地物の魚介類・いしる・郷土料理など地元産にこだわり、味自慢とPRできる水準の「能登の食」を提供。フルコースでなく少量多種類楽しめるように、ワンコイン価格、食べ歩き可能な形態(屋台など)、食巡りのためのマップを用意するなど回遊を促すとともに、地元との交流が深まるような工夫を加える。(まちなか観光)</li> <li>● 地元の発酵食品・醸造品・酒など、生活に根付き安全な食品を土産として企画する。素朴な包装やロゴ、雰囲気あるディスプレイなど販売方法の工夫でも魅力を高め、買う楽しみの素材を提供する。(まちなか観光)</li> </ul>
「自然との共生を図る地にしよう。」	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 学校や児童を持つ家族層向けに、専門家や漁業関係者などの協力を得て、海辺の環境の学習や漁業体験の機会を提供する。環境に対する理解を深めてもらうとともに、魚の種類学習や調理体験などもしてもらう。(農業・林業等でも同様。)(体験滞在型観光)</li> </ul>
「心身を癒す地にしよう。」	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 健康志向にマッチした長期滞在型プログラムを用意する。女性や健康増進に関心が高い層をターゲットに、自然とのふれあい・温泉・地元の食材などによるヘルシーかつ高品位な心身リフレッシュメニューを提供する。(体験滞在型観光)</li> </ul>

### ③効果的なプロモーション活動

能登空港開港を機として、関係自治体等により首都圏を中心に能登を売り込むための積極的なプロモーション活動が展開されている。能登地域の知名度向上・イメージアップにつながるこのようなサポートの継続が期待される。一方で前章で整理したように、まちなか観光・体験滞在型観光に関しては個人に直接地域情報を伝えるというパーソナル対応も重要である。この視点から能登のまちなか観光・体験滞在型観光をプロモーションする際の留意点を整理すると次のようになる。

- ・能登に関心を持ってくれた人に、タイムリーかつ充実した情報を提供しようという意識が地域全体（特に活動の中核主体やリーダー）にあるか
- ・伝達する情報の内容は、季節ごとの景観スポット、旬の食材や料理、休憩どころ、地元の人でないと分からない裏情報といった、より具体的できめ細かなコンテンツとなっているか（現地でのみ提供される限定情報も来訪の満足度を高める手段となり得る）
- ・能登地域の宿泊施設の現況からすれば民宿の利用も多いと考えられるが、施設や料理の内容・料金の案内に加え、あるじの考えや宿側のこだわり、近隣でどういった観光メニューが用意されているかなど、顔の見える情報が提供されているか（言うまでもなく宿泊や料理は旅の重要要素である）
- ・伝達ツールや経路が重層的になっているか（ウェブ・ガイドブック・イベント・アンテナショップ・道の駅・携帯電話メールなど）
- ・ウェブサイトについては、様々な情報をワンストップで入手できる能登ポータルサイト、異なる地域の民宿同士が連携した案内サイトなどの工夫を意識しているか
- ・消費者に直接アクセスしていく需要喚起型のプロモーションを行っているか（メーリングリストを活用しeメールにてリピーター向けに情報提供を行う、通信販売業者や生協とタイアップし安全な食品や天然素材などのPRを行う、学校向けに地域文化や自然環境の学習プログラムのPRを行うなど）

こうしたプロモーション活動により能登の「お得意様」を増やし、彼らが口コミで能登をPRしてくれるようになれば、能登のブランド価値向上につながることとなる。

## おわりに

本稿では、能登地域の観光振興の一方策として、まちなか観光・体験滞在型観光の深化とそのポイントについて考察した。ポイントとして指摘した三つの事項は、決して目新しいものではないが、取り組みには不可欠のものである。能登の各地でも様々な活動がなされているが、これらを一過性のものに終わらせないためにも、三つのポイントの重要性について改めて理解が深まることが望まれる。また、能登地域でまちなか観光・体験滞在型観光を深化させるための切り口をいくつか示した。これらはあくまで例示にとどまるものだが、参考とした各地の事例には多くのヒントが詰まっている。こうしたヒントを活かして、地域資源の魅力を熟知している関係者がより優れた企画を生み出し、能登内各地そして能登全体の活力が高まることを期待したい。

まちなか観光・体験滞在型観光の取り組みを広げていくことは、まさに地域づくり活動そのものである。これらは一部ハード整備を伴う場合もあるが、本質は地域の叡智の結集が求められるソフト事業である。その成就には多大な努力と時間を要する一方で、エージェントの集客力に頼れる従来型観光とは異なり、即効性に乏しい面もあろう。しかしながら、このように形作られた「まち」や「むら」こそ地域住民自身の誇りであり、その「光を観に」訪れる人々にとっても魅力あふれるものになると言えよう。そして、こうした取り組みが中長期的には地域の自立的発展を促すものと考えられる。この点で、本稿が能登地域だけでなく他地域の観光振興の検討にも参考となれば幸いである。

## 参考資料

参考資料 1 最近の能登地域における観光振興・地域づくりの取り組み

参考資料 2 豊富な能登地域の地域資源

## 参考資料1 最近の能登地域における観光振興・地域づくりの取り組み

実施地点	事業主体	取り組み内容及び活動の目的
輪島市	輪島市	輪島市河井町の馬場崎通り、輪風の街並みに配慮した外観の交流サロン「語馬処(かたりましよ)」を建設。まちなかの回遊性を高める中心部の拠点として、観光客の休憩スポットとしての機能を担う。
		「行政視察」と「会合・合宿」の利用を呼びかけるパンフレットを、全国の自治体や商工会へ発送。交流人口の拡大に向け誘致実績の増加を目指す。
		旧輪島駅を改装した道の駅「ふらっと訪夢」の隣に物産館「うまいもん処」を開店、町の中心からの誘客を図る。
		輪島の漆や職人文化を発信する拠点として「輪島工房長屋」を整備。朝市や地物市に訪れる観光客の回遊促進を図る。
		輪島大祭に韓国・光州広域市立民俗博物館の関係者の視察誘致。
		マリントウン造成地の暫定利用として海洋関連店舗や飲食店によるにぎわい創出を図る「チャレンジ・ショップ事業」を実施。「輪島スキューバステーション」「地物さざえめし店」などが開業。
		「のとやすらぎの郷整備事業」の一つとして、かやぶきの郷づくりの移転再築工事を実施。
		地元の食材を地物市から購入し、親子が調理を楽しむ集いを開催。地物による家庭料理の魅力を伝える。
	輪島市および関連団体	輪島塗工房の軒先に、デザインを統一した「塗師屋」「蒔絵」「椀木地」など輪島塗の製造工程10業種の看板を掲示。観光客による路地裏にある漆器工房めぐりの促進を図る。
	輪島市観光協会	石川県の無形文化財にも指定されている「御陣乗太鼓」を、旧輪島駅前の広場でほぼ毎日無料で上演。市街地での賑わい創出を目指す。
	海洋レジャー実行委員会	輪島沖合の七ツ島を定期船で周遊する「サンセットクルーズ」を実施、輪島の美しい夕日を楽しんでもらう。
	株まちづくり輪島	輪島市街地を見て歩き郷土の魅力を再発見する「第一回まちなか探検隊」の試みを実施。
	輪島21世紀未来計画研究会	輪島を住みよい町にし、若者が定住できる環境の整備に向け、機関誌の発行などを行う。
	わいち商店街振興組合	商店街地域の振興と朝市を中心とする中心市街地の回遊性ある面的なまちづくりを行う。
	ビジョン21南志見の会	南志見地区の発展のため、文化事業などを行う。
三井の活性化を考える会	旧三井村、山村集落の中・長期的な発展を図るため、異業種法人三井経済活性化共同組合の設立、特産市場の開設支援などを行う。	
町野の活性化を考える会	町野地区の発展を図るため、地元商店街活性化に向けたイベント等を実施。	
やすらぎの里金蔵学校	金蔵小学校の統合をきっかけに、5ヶ寺の寺院を中心として「やすらぎの里」として活性化。	
ギャラリーわいち	輪島にはなかったモチーフの漆作品・作家の紹介及び交流を深めることを目的として設立。中心市街地におけるギャラリーを運営。	
曾々木かもめ座	曾々木に伝わる民話や出来事を題材とする演劇の上演や、手作り特産品の販売等を行う。	
あらいそグループ	地域の文化を次世代に伝えるため、郷土料理講習会開催などを行う。	
輪島市漁協輪島崎婦人部	輪島に出来ない食べられない味覚の創出を目指して水産物特産品づくりに取り組む。	
能登圏青年協議会	能登地域における一体的な地域づくりに関する調査研究、情報発信等の支援を行う。	

	輪島吹奏楽団	演奏会や親子ふれあいコンサートなどを開催し、音楽文化の振興を通じた地域づくりを行う。
	こだわりもんの会	輪島市朝市で代々リヤカー屋台で鮮魚販売を行っている漁師の妻の皆さんが、「本物」を販売すべく設立。
	曾々木青年会	曾々木地区の活性化のため、海岸清掃から曾々木海藻祭、寒中みそぎ等のイベントを主催。
	能登麦屋おさよ会	民謡を考え伝え人々の活力とすべく、老人施設の慰問や商店街イベントでの発表などを行う。
	馬場崎商店会	ハード面だけではなく、ソフト面でも魅力ある街並み形成を行うため、まちづくり会議やまちなかコンサートなどを行う。
	特定非営利活動法人輪島市地域づくりNPO	行政・市民・企業協働のまちづくり、地域づくり推進に関する事業を行う。地物市、サンセットクルーズ、ジギングバトルを運営している。
珠洲市	柁夢のと	平成15年1月に設立されたTMO。柁夢のとが中心となり、市内の農園で栽培されているハーブを活かした中心商店活性化の取り組みを開始。ハーブ商品のアンテナショップ開店のほか、商品開発やPRのための情報発信基地創設を進めている。
	珠洲市ほか	ハーブによる地域おこしに取り組む全国43市町村、8民間団体が参加する全国ハーブサミットを開催。地域おこしの事例研究のほか、ハーブの摘み取りなどを通して「ハーブの街珠洲」を全国に発信していく。
	珠洲ビデオリブクラブ	珠洲の代表的な祭りを収録した「珠洲のキリコ祭PRビデオ」を制作し、県内外の旅行会社・観光バス会社へと送付。祭りへの誘客を目指す。
	珠洲市および観光協会	市内の宿泊施設で、統一したメニューのカニ料理を市の助成により安価に提供する「冬の奥能登まるカニ（まるかじり）」キャンペーンを実施。食の魅力での誘客を図る。
	ぷらいむ128	地域の景勝地の保全管理、イベント、植樹等を行い、地域の良さを見直し発展に寄与する。
	一步の会	ラブ・リバー・デー、椿の里保全管理等の実践活動、砂取りまつりに参画し、主体的に地域おこし事業に取り組む。
	平家の郷構想研究会	平家の郷構想を進めるために、平時忠周辺整備、平家物語の探求等、調査研究活動を行う。
	大崎塾	外浦地区に群生している市花藪椿の観光資源化と豊かな海の活用を図り、生活基盤の強化並びに郷土振興を目的とする。
	バイエリア珠洲推進協議会	21世紀に向けて個性的で住みやすい港湾都市づくりを目指したバイエリア珠洲構想について広く市民に理解を得るためのイベントや研修等を実施。
	フォーラムふるさと塾	学習会、先進地交流を实践し、地域の活性化、人づくりを行う。
七尾市	七尾市	和倉温泉の町並み修景整備の一環として、「西国三十三尊像を巡る仏像散策路コース」を設置するほか休憩所や案内板の整備に取り組み、和倉温泉への集客増を目指す。
	七尾マリンシティ推進協議会	港を中心とした「マリンシティ七尾」を目指し、まちづくりシンポジウム、能登国際テント村等を開催。
	西湊みらい協議会	西湊東部地域6町内会において魅力ある地域づくりを目指す。
	薬師の里・郷土食研究会	海の幸・山の幸に恵まれた薬師の里で、地場産品の開発を行う。
穴水町	農業生産法人能登ワインナーなど	能登で栽培された葡萄を使った「能登ワイン」を新たに製造、将来地域の名産品とすべく生産拡大を目指す。
	穴水町	昼食・夕食に手軽なメニューを紹介する地元のグルメガイド「まいもんマガジン」を制作。
	あすなる懇話会	サントク朝市、遊求休備IN穴水、まちおこし放談IN穴水の開催、「やるまいかネットワーク」の結成等を行い、地域に根ざした家業の発展と町づくりに参画。

	奥能登べんこち びり	ユニークな発想や技術を持った仲間を募り、奥能登で「何か楽しくて」地域の活性化につながる活動を行う。
	FMラジオで能登 をひとつにする 会	インターネットラジオ「Web Radio能登」を開局し、能登半島のイベント情報等を発信。
門前町	総持寺及び門前 町教育委員会	ドイツ映画「MON-ZEN」を撮影の舞台となった総持寺祖院にて上映。地域住民に「禅の里」としての地元の良さを伝えていく。
	総持寺祖院	かつて地元住民を対象に座禅や僧との対話が行われていた「参禅会」を10年ぶりに復活。地元と寺とのつながり強化を目指す。
	門前町	すり足で歩くと音を立てる「鳴き砂」の浜を有する全国の自治体や保全団体が集まり「全国鳴き砂サミットin門前」を開催。地域の保全活動などについてパネルディスカッションなどを実施。 参拝客や観光客に広く地元を回遊してもらいにぎわいを呼び起こすため、総持寺周辺の街並み環境整備を実施。
	じんのび悠人	町の施設である「じんのび村」を拠点に、門前町をアピールする観光マップの作成等を行う。
内浦町	のと鉄道	地域の語り部が案内し、秘密のスポットでホテル鑑賞を楽しむ「ホテル列車」を運行。奥能登の自然とローカル線を味わう。
	内浦町	交流人口拡大を目的に、「イチゴ狩り」や「地引き網」「海洋深層水の豆腐づくり」など体験メニュー実践の場として、体験交流施設「ラプロ恋路」を開館。滞在型観光の拠点としての役割を期待。
能都町	能都町	地域の歴史や風俗の地域住民への伝承、鯨肉を食べることができる町として誘客を目的としてイベント「鯨楽旬談」を開催。くじらフォーラムの他、食談義などを実施。
	能都町魚のおい しい街づくり委 員会	能都町を「魚のまち」として全国に認知させるべく、街づくりの取り組みを検討。
	MY-SAKE 倶楽部	お酒を町内外の人達と自らの手で米づくり・酒づくりに参加しながら、地域おこしを図る。
	春蘭の里実行委 員会	緑豊かな自分達の地域を守りながら、自然と共存する地域づくり・村づくりを行う。春蘭の育成などをてがける。
	能都町商工会青 年会	商工会事業を積極的に推進すると共に、青年経営者の資質向上に取り組む。
	商都Noto	能都町中心市街地活性化を目的に、店主が講師となり、職業に関する講座を開設したりしている。
	かたねぼうの会	山村活性化を進めるために、活性化ビジョンの作成、特産品のブルーベリーに関する国内、海外の需要動向調査を実施。
	当日公民館	地域に伝わる「猿鬼伝説」を素材とした地域活性化に取り組む。
富来町	青年塾	町の将来構想・長期基本計画等の勉強会、県内先進地視察、小冊子の企画編集・配布を行う。
	富来町商工会青 年部	地域振興の原動力となるべく、「ジャンボバザール」や「見にトライアスロン大会」等のイベント事業、クリーン作戦やチャリティーゴルフなどの奉仕福祉事業などを実施。
志雄町	所司原村づくり 推進協議会	自然環境の整備、貸し別荘の設置などを行い、都市住民との交流による村づくりを目指す。
	ゆう和会	地域の高齢者、身障者等が安心して生活できるように、デイサービス等を通して地域に貢献。
志賀町	志賀町国際交流 の会SMILE	国際交流を通して会員及び町民の国際感覚と視野を広め、人的交流を図る。
田鶴浜町	ふるさと21青 年塾	夢マップ作成のほか、ふるさと写真コンテスト等を開催。

	七尾西湾の自然にふれあう会・散策路	七尾西湾沿岸の1市3町が協力して、共有財産としてのふるさとの自然を守り、郷土愛を育て豊かな自然を未来に引き継ぐ。
中島町	鉦打ふるさとづくり協議会	農林業等の振興策を研究するとともに、行政との協議・協力を進めつつ新しいふるさとづくりを推進する。
柳田村	かたりすと	村の植物公園で一般公開している神事「あえのこと」開催にあわせ、古里の伝統文化に理解を深めてもらおうと魅力を民話で解説、紹介する取り組みを実施。
鹿島町	能登乃国ゆするぎ塾	まちづくりに関する先進地の視察、郷土の歴史文化の勉強会、従来なかった「町祭」の企画運営に積極的に関与。町の活性化に向けた行動を起こす。
全域	石川県能登空港活性化・利用促進協議会	能登空港の二次交通手段として、乗り合いタクシー「能登空港ふるさとタクシー」を主要幹線沿いに運行し、利便性の向上を図る。
	石川県	農林漁業者による民宿経営や市民向けの農園開設の規制を緩和する「石川グリーン・ツーリズム促進特区」を申請、グリーンツーリズムによる地域活性化の足がかりとする。
		「全国グリーン・ツーリズム研究会in能登」を開催。能登各地の自然や食などに触れる体験ツアーとシンポジウムを実施し新たな半島の魅力を発信していく。
		能登半島広域観光協会と共同で、空港を発着点に半島を巡る2泊3日のモデルコースを旅行代理店に提案。テーマごとに体験メニューの紹介もあわせて行う。
		冬季利用促進のため能登の豊かな食材を生かしたイベント「能登冬の陣」を実施。
		羽田ー能登便が目標の平均搭乗率70%に達しない場合、石川県と地元19市町村が最大で2億円を航空会社に補填する全国初の搭乗率保証制度を創設。
		NPO法人能登ネットワーク
	語り手グループかたりすとなど	奥能登の歴史や文化を知るきっかけとして、柳田村、珠洲市、輪島市の語り手グループが能登空港で「出前口演」を毎月1回開催。
	国土交通省	全国の半島地域の自治体、まちづくり関係者らを学生に見立て半島活性化策を探る「半島ツーリズム大学」を開催。
	各自治体	住民対象の運賃助成制度を19市町村で導入したほか、3市町では地元での宿泊客にも運賃・宿泊費を補助。
	特定郵便局	羽咋郡以北19市町村の穴場スポット等をまとめた観光地図「能登風土記イラストマップ全集」を作成し、各特定郵便局に設置。

出典：北國新聞、北陸中日新聞など北陸地域新聞各紙及び石川県地域づくり団体ホームページ参照の上、筆者作成。



## 参考資料2 豊富な能登の地域資源

(株式会社日本インテリジェントトラスト「能登地域振興のための基礎調査報告書」より抜粋)

### ①祭り

#### ・キリコ祭り

キリコと言うのは祭りの際に神輿のお供として担ぎ出される巨大な御神灯であり、夜道の明かりとして氏子らが神に捧げる御灯明であって、「切子燈籠」を縮めた呼び名である。太古の昔においては神仏に捧げる小さな灯明であったものが、時代を経て町民の経済基盤が強くなると共に大型化して来ており、今ではその大きさは町によって様々であるが、高さにして4～5メートル程度のものが多い(七尾市石崎町のキリコは高さ12メートル、重さ2トンである)。

能登のキリコは、彫刻に金箔を施し、白木を漆で塗り上げ、キリコの胴体部分には墨書で大きな文字を書き、背面には武者絵等を描き、ぼんぼりや幕などの飾り物を取り付けた華麗なデザインである。ただしその意匠は町ごとに様々である。

能登地方の祭礼でキリコが担ぎ出される様になった時期は定かではないが、1646(正保3)年の輪島の神社における祭礼に関する記述の中にはキリコが登場している。

現在は、図表25に整理したとおり、毎年7月7日・8日に能都町宇出津で行われる「あばれ祭り」を皮切りに、10月中旬にかけて能登(特に奥能登)中の各地でそれぞれの地域特有のキリコ祭りが行われている。キリコ祭りが行われるのは、場所にして100箇所余り、キリコの数にすると700～800に上る。

図表25：能登地域のキリコ祭り

	口能登	中能登	奥能登
	開催日	開催日	開催日
	羽咋市、富来町、志雄町、志賀町、押水町	七尾市、田鶴浜町、鳥屋町、中島町、鹿島町、能登島町、鹿西町	輪島市、珠洲市、穴水町、門前町、能都町、柳田村、内浦町
7月		第2土 第4土 31	7・8 20・21 27 30 28 31 28
		七尾祇園祭(七尾) 塩津納涼祭(中島) 向田火祭り(能登島)	あばれ祭り(能都) 飯田灯籠山祭(珠洲) 恋路火祭り(内浦) 水無月祭り(輪島) 松波大祭(内浦) 名舟大祭(輪島) 中居キリコ祭り(珠洲)
8月	中～下旬 14 最終土	第1土 14	7 15・16 17 17・18 第3土 21 23～25 24・25
	八朔祭り(富来) 西海祭り(富来) 福浦祭り(富来)	石崎奉灯祭(七尾) 新宮納涼祭り(中島)	七夕キリコ祭り(珠洲) 明千寺キリコ祭り(穴水) 曾々木大祭(珠洲) 沖波大漁祭り(穴水) ござれ祭り(柳田) おさよ祭り(門前) 輪島大祭(輪島) にわか祭り(能都)
9月			10・11 12 第2土 14・15 16 第3土 14・15
			蛸島キリコ祭り(珠洲) 大谷キリコ祭り(珠洲) 大町・川島祭り(穴水) 寺家キリコ祭り(珠洲) 柳田大祭(柳田) 小木袖キリコ祭り(内浦) 正院キリコ祭り(珠洲)

出典：「能登キリコ祭り」せいしん社

## ②神事・風習

### ・アエノコト（国重要無形民俗文化財）

奥能登地方の農家に古くから伝承されている神事。家単位で行われる新嘗祭とも言うべき行事で、目には見えない田の神を実際にいるが如く接待する。「アエ」は饗応、「コト」は祭りを意味する。

### ・アマメハギ（国重要無形民俗文化財）

夕方から3人の青年が天狗・猿・鬼の面をかぶって家々を訪れ、「怠け者はおらんか」と言って子供たちをおどし、主人が餅などを差し出すと漸く退散する。秋田県のナマハゲも同種の、仮面仮装のまれびと（客人）神を迎える行事である。

### ・面様年頭（国重要無形民俗文化財）

輪島地方で小正月に係わる行事であり、奇怪な面と大黒頭巾をかぶり、手に榊の小枝を持った夫婦神が町内をおはらいして回る。②のアマメハギと同様、まれびと信仰に根ざした風習である。

## ③民話・民謡

### ・猿鬼伝説

輪島から柳田一帯で悪さをしてまわっていた、毛むくじゃらで頭に角のはえた猿鬼を頭とした鬼の郎党を神杉姫が退治する伝説。舞台となっている柳田村には、伝説にまつわるスポットが点在している。

### ・能登麦屋節

門前町の七浦（しつら）地方を中心に歌い継がれてきた民謡。藩政期に栄えた輪島素麺づくりの原料である小麦粉曳きの作業唄である。越中五箇山に伝わる麦屋節は、輪島から伝えられたという説もある。

### ・輪島まだら

輪島地方に伝わる、「海の祝い歌」。豪快な節回しと格調高い調べが特徴。仕事始め、祭礼、婚礼など、めでたい席では必ずと言っていいほど歌われる。富山県の放生津・岩瀬・魚津に伝えられる「まだら」も能登から伝えられたものと言われる。

## ④歴史

### ・朝鮮半島と交流の歴史

我が国最古の史書である「古事記」「日本書紀」には、高麗人が北陸沿岸に来航したことが記されており、また福浦港には8から9世紀に渤海使がたびたび渡来したことも知られている。こうした歴史と、前述したアエノコトやアマメハギといった「客人信仰」、キリコ祭の起源が中国に求められるなど、能登半島と大陸を関係づける事実は数多くみられる。

#### ・平時忠と時国家にまつわる伝説

大納言平時忠は平家の頭領であった平清盛の妻の兄にあたる。1185年に壇ノ浦の合戦で平家は源氏に敗れ、一族の多くは戦死するか捕らえられ、打ち首となった。こうした中で時忠は、後白河法皇に嫁いでいた妹の建春門院からの助命嘆願や、娘が敵将である義経に嫁いでいたことなどから、死一等を減じられ、能登へ流刑となった。現在でも、時忠とその一族の墓と見られる五輪の石塔が残っている。

この時忠にまつわる伝説として、以下の2つがある。

○「鈴の御崎」（現在の珠洲市三崎）で「白波の打ち驚かす岩の上に寝入らで松の幾世経ぬらん」と悲傷の歌を詠んだとされる。＝「源平盛衰記」上の伝説

○敵将であり、且つ義理の父子の関係にある源義経が、時忠の配所を訪問したとされる。

#### ・義経伝説

源義経は、平家を滅ぼした後、兄である頼朝に憎まれ、追放の身となる。そして、京都から琵琶湖を渡って北岸に着き。若狭湾に出て、船で加賀の海岸に上がり、安宅の関を越えて能登半島の海岸沿いに北上し、義父時忠の配所を訪問する。こうしたことから「義経伝説」ゆかりの地は主として、能登外周部から内浦の珠洲市周辺にかけて点在しており、知られているだけでも40ヶ所はあると言われている。

一例としては、

○安宅の関（小松市）

○弁慶のひっぱり餅（福浦）

：弁慶が、杵で餅をつくのが面倒だというので、蒸し上げた餅を両手でこねてはひっぱり、こねてはひっばって、一臼分つきあげたという言い伝えである。

○義経の碁盤石（鳳至郡門前町）

：義経が都を懐かしみながら毎日碁を打ったと伝えられる、島の上の岩場。

○義経の舟隠し（輪島市）

：折からの荒波を避けるため、入り江に舟を隠したと伝えられる岩場。

○蟬折れの笛（珠洲市）

：義経が吹いて竜神に祈りを捧げ、海上の風波を鎮めたとされる似仁王（もちひとお）遺愛の「蟬折れの笛」が保存されている。

○珠洲市馬縹町は、義経の馬を繋いだことに由来するとの言い伝えがある。

○義経が義父時忠の配所（珠洲）を訪れたという伝説がある（既述）。

○義経の烏帽子岩（内浦町）

○弁慶の足跡（能登島にある池）

## ⑤芸術

### ・大伴家持

746（天平18）年、越中国司（今でいう知事職）に着任した家持は、同20年に能登路を一巡し、その際に詠った歌を万葉集に多く残している。

○「珠洲の海に朝開きして漕ぎ来れば長浜の浦に月照りにけり」

：珠洲市飯田町付近から船で帰途につき、長浜の浦（七尾市三室町辺）に停泊して詠んだ歌とされる。

○「志雄路から直越え来れば羽咋の海朝なぎしたり船楫もが」

：国府のあった高岡から気多大社に参拝しようとして山越えし、志雄街道を行く途中で眼下に広がる邑知潟を詠ったもの。

○「鳥總立て船木伐るといふ能登の島山今日見れば木立繁しも幾代神びそ」

### ・与謝野 鉄幹（1873年－1935年）

○「能登島を出でたる月が寝てのちも障子に白し前の海より」

### ・高浜 虚子（1874年－1959年）

俳誌「ホトトギス」を主宰し、明治・大正・昭和にわたり活躍。昭和24年4月に能登の俳人の招きを受けて当地を訪問。大伴家持を偲んだ俳句など、多くの句を残している。能登ホトトギス俳句大会などに出席し、能登俳壇の興隆を促した。

○「家持の妻戀舟か春の海」

○「花の宿輪島は漆器どころなる」

○「奥能登にかくてようやく木の芽ふく」

### ・折口 信夫（1887年－1953年）

国文学者・歌人。養嗣子の春洋（はるみ、国文学者・歌人）が羽咋の出身だったこともあり、度々能登を訪れ、歌を詠んでいる。

「羽咋の海 海阪晴れて、妣が国今は見ゆらむ。出でて見よ。子ら」「倭をぐな」

### ・松本 清張（1909年－1992年）

代表作「ゼロの焦点」（昭和34年発表）での、能登金剛の断崖の場面が有名である。

### ・長谷川 等伯（1539年－1610年）

長谷川等伯は、16世紀桃山時代の画聖。七尾の生まれで、京都の狩野派に対抗して「長谷川派」を築き、数々の名作を残している。1610年、徳川家康に召され、江戸に向かう途上で病死した。

主な作品としては、

○祥雲寺（豊臣秀吉が長子鶴丸の菩提寺として建てた寺）の障壁画で、現在は京都智積院（ちしゃくいん）に所蔵の国宝「楓図襖」、「松に草花図屏風」他

○羽咋市妙成寺「日乗上人画像」

- 羽咋市正覚院「十二天図」
  - 七尾市実相寺「日蓮上人画像」
  - 七尾市龍門寺「達磨図」
  - 七尾市靈泉寺「十六羅漢図」
- などが現存している。

## ⑥寺社

### ・総持寺（門前町）

総持寺は、1321（元享元）年に開創された曹洞宗の大本山であり、その後末寺を全国に増やし、延享年度（江戸時代中期）には、その数1万6千余に至った。ところが、1898（明治31）年4月の火災により、塔堂伽藍の大部分は焼失してしまった。門前町では早期の再建を願ったものの、結局は総持寺発展の大局に立ち、1907（明治40）年、総本山は横浜市鶴見区に移転された。この後、再建に着手され、1932（昭和7）年に完成に至った。現在では本山の実家・本家に当たる「祖院」という位置付けにある。

近年は、かつて藩米を収納していた蔵を改造し、ギャラリー「がほうじん」をオープンするなど、地域や観光客に開かれた寺を目指して様々な試みがなされている。

### ・気多大社（羽咋市）

気多大社が文献上に登場するのは「万葉集」である。748（天平20）年、越中守大伴家持が能登を巡行した時に、先ず参詣に立ち寄ったのがここであったとされている。当時から「能登一宮」となるべき待遇を受けていたことを示している。

多くの重要文化財を有しているが、その中でも代表的なのは、本殿の背後にある「入らずの森」と称される常緑広葉樹の自然林である。樹齢300～500年とされ、古くから神域として住民の出入りが禁止されてきた。

大社で催される祭祀としては、「平国祭（おいで祭り）」、「鶉祭り」がある。

### ・妙成寺（羽咋市）

北陸における日蓮宗の本山で、能登一番の伽藍を誇る。加賀藩初代～5代の間に建立された。五重塔をはじめ、10棟の堂塔が重要文化財に指定されている。

## ⑦伝統工芸

### ・輪島塗

沿革：約1,000年前に大陸から伝来したとする説など、起源については諸説がある。

その技術は15世紀には確立されており、また沈金は18世紀、蒔絵は19世紀にそれぞれ確立されている。昭和50年に伝産法の指定、52年に国の重要無形文化財にそれぞれ指定されている。

特徴：輪島特有の地の粉を用いた堅牢な下地造りと優美な沈金、蒔絵の技術が名高い。

製品：飲食什器、室内装飾品、茶道具等

・珠洲焼

沿革：平安後期（12世紀中葉）から室町時代（16世紀前半）にかけて、珠洲市と内浦町で生産されていた中世陶器であり、船を利用して日本海沿岸の東北・北陸の各地や北海道の函館まで運ばれている。その後途絶えたが、昭和51年に再興された。

特徴：渋い黒灰色の自然釉が特徴。

製品：酒器、花器、茶器

・七尾仏壇

沿革：江戸時代の前半が起源とされる。昭和53年に伝産法の指定を受けている。

特徴：非常に堅牢なことと、豪華な彫刻が特徴。

製品：仏壇、神輿

・七尾和ろうそく

沿革：発祥は明らかでないが、江戸時代には北前船により九州や東北まで販路が広がっていた。

特徴：木ろうを原料とし、伝統の手作り技術で作られる。

製品：和ろうそく

・能登上布

沿革：起源は古く、大和朝廷に献上したとの説もある。大正年間で最盛期であった。県の重要無形文化財に指定されている。

特徴：麻織物で、織巾に十文字縞を120～140も織出すなど、縞合わせの正確さは上布として最高級である。

製品：夏の高級着物地

⑧まちなか・農漁村風景

・千枚田（輪島と曾々木の間）

高洲山の山裾の急斜面を切り開いて耕された田で、僅か1.2ヘクタールの面積に2,000枚以上の田が広がっている。

・間垣（輪島市西保海岸の大沢・上大沢地区等）

高さ5メートルほどの細い苦竹を隙間無く並べた垣根であり、夏は暑い西日を遮り、冬は冷たい季節風から家屋を守ると言う効果がある。何気ない風景ではあるが、奥能登ならではの素朴なたたずまいである。

## 【参考文献】

- 石川県『石川県統計書』（各年）  
石川県『石川県市町村勢要覧』（各年）  
石川県『統計からみた石川県の観光』（各年）  
国土交通省『平成15年度版観光白書』  
社団法人日本観光協会『平成14年度観光の実態と志向 第21回国民の観光に関する動向調査』  
株式会社まちづくり輪島『輪島TMO構想（輪島中小小売商業高度化事業構想）』  
石川県地域づくり協議会『石川県地域づくり推進協議会情報誌 My Page』（各号）  
財団法人アジア太平洋観光交流センター観光まちづくり研究会『観光まちづくりガイドブック』  
日本政策投資銀行『地域づくり型観光の実現に向けて ー地域振興策としての観光の可能性ー』  
日本政策投資銀行地域企画チーム編著『中心市街地活性化のポイント まちの再生に向けた26事例の工夫』ぎょうせい  
日本政策投資銀行地域企画チーム編著『錦おりなす自立する地域 9つの視点から見た100の地域振興プロジェクト』ぎょうせい  
社団法人日本観光協会『観光振興実務講座～地域を活かすソフト戦略～』  
塩田政志＋長谷政弘編著『観光学』同文館  
社団法人日本観光協会『月刊観光』（各号）  
岩手県遠野市『遠野市観光推進計画』  
社団法人遠野ふるさと公社『エスコートブックとおの』  
社団法人農山漁村文化協会『自然と人間を結ぶ 2002年4月号』  
株式会社日本インテリジェントトラスト『能登地域振興のための基礎調査報告書』  
能登地域観光空間づくり調査委員会『能登地域観光空間づくり調査 報告書』  
財団法人北陸産業活性化センター『能登地域活性化振興計画策定基礎調査報告書』  
藤平朝雄『奥能登万華鏡』能登印刷出版部  
せいしん社『能登キリコ祭り』  
藤平朝雄『能登の時代がやってくる 半島観光今昔物語』石川県観光連盟  
深井甚三編『越中・能登と北陸街道』吉川弘文館  
和嶋俊二『奥能登の研究』平凡社  
慶友社『加賀・能登の生活と民俗』  
北国出版社『加賀・能登の生活行事』  
歴史書刊行会編『加賀・能登の芸術風土』石川県  
佃和雄『能登 総持寺』北国出版社  
村上学編『義経記・曾我物語』図書刊行会  
ぎょうせい『現代に生きる伝統工芸』  
講談社『日本の伝統工芸』